

Olympic

# オリンピック教育

Vol.8 2019/04-2020/03

Education



筑波大学オリンピック教育プラットフォーム  
筑波大学附属学校オリンピック教育推進専門委員会



# 目次

## はじめに

筑波大学附属学校群のオリンピック・パラリンピック教育 .....	茂呂 雄二 ...	2
ご挨拶 .....	真田 久 ...	2

## 研究・活動報告

令和元年度スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」実施報告 .....	真田 久、宮崎 明世、大林 太郎、鈴木 王香、福田 佳太 ...	3
クーベルタン・嘉納ユースフォーラム 2019 実施報告 .....	中塚 義実 ...	5
「日本体育科教育学会第 24 回大会ラウンドテーブル」研究発表報告 .....	宮崎 明世 ...	11
「日本スポーツ教育学会第 39 回学会大会」研究発表報告 .....	宮崎 明世 ...	12
「日本体育学会第 70 回大会」参加報告 .....	鈴木 王香 ...	13

## 実践報告

附属小学校 .....	仲嶺 盛之、清水 由 ...	14
附属中学校 .....	秋山 和輝 ...	16
附属高等学校 .....	鮫島 康太 ...	19
附属駒場中・高等学校 .....	登坂 太樹 ...	20
附属坂戸高等学校 .....	藤原 亮治 ...	22
附属視覚特別支援学校 .....	山本 夏幹 ...	24
附属聴覚特別支援学校 .....	岡本 三郎 ...	27
附属大塚特別支援学校 .....	紅林 仁 ...	29
附属桐が丘特別支援学校 .....	寒河江 核 ...	31
附属久里浜特別支援学校 .....	塚田 直也 ...	33

## 特別寄稿

10 年を振り返って .....	大橋 民恵 ...	35
世界に向けたおもてなしの発信 .....	江上いずみ ...	38

## 資 料

教師用指導案（東京 2020 大会組織委員会 HP 掲載分） .....		43
--------------------------------------	--	----

『オリンピック教育』第8巻をお届けします。

本来は、本年はオリンピックとパラリンピックが開催される予定でしたが、残念ながら新型コロナウイルス感染症の問題が発生したために、東京2020オリンピック・パラリンピックが延期となりました。筑波大学においては、さまざまな教育・研究組織で、オリンピックとパラリンピックに関わる活動をさまざまな形で展開しています。その中で、オリンピック教育プラットフォームと附属学校オリンピック教育推進専門委員会が中心となって行っている活動をまとめたものが本冊子です。本冊子は2011年度に附属学校オリンピック教育推進専門委員会が発行した「オリンピック教育報告集」が発展し、2013年以来、毎年刊行されてきました。本号も、プラットフォームによるさまざまな活動と附属学校における実践活動の報告が掲載されています。筑波大学のオリンピック・パラリンピック教育の一端である、附属学校11校全校の活動をまとめてご覧いただけるように編集した資料となっております。

令和元年度は、オリンピック教育推進専門委員会ならびにCORE運営委員会を定期開催しつつ、2019年度スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」の進捗状況の共有と、附属学校群におけるオリパラ教育の進展を共有発信に務めました。

また、普通附属と特別支援との連携推進委員会が主導して、12月に「共生社会を目指すスポーツ交流とシンポジウムの集い」を開催し、パラリンピアンへの講演やパラリンピック種目の競技やアダプテッドスポーツの体験・交流の機会を設け、今後の共生社会の在り方に関する情報の発信を行いました。おかげさまで盛況な会となり、オリンピック・パラリンピックへの大きな期待を実感するとともに、共生社会実現への確信も得られました。

## ご挨拶

筑波大学体育系、CORE事務局長 真田 久

2019年度は全国15府県・政令市でのオリンピック・パラリンピック教育が行われました。また附属学校においても多くの取り組みが行われ、それらのうち、附属小学校、附属坂戸高校および久里浜特別支援学校の実践については、本誌のみならず、スポーツ庁の実践報告集にもモデル授業として掲載されることになりました。それらの実践を踏まえ、いよいよ本番の年度を迎えると思いきや、年度末に新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により、IOCおよび日本側の話し合いにより、東京2020大会が1年延期されることが決められました。近代オリンピック史上初のことです。その後、日本でも感染が拡大し、多くの学校では生徒は登校することができず、オンラインによる授業の実施という状況になりました。このような下でオリンピック教育はどのように展開するべきなのでしょう。これを附属学校の皆様と一緒に考えていきたいと思えます。ステイホームの声のもと、伸び伸びスポーツすることができない今、身体を動かすこと、皆とコミュニケーションをとりながらスポーツを行えることの大切さをしみじみ感じます。人は運動することを本質的に兼ね備えた存在であることを認識させられます。

ところで、古代オリンピックの始まりは、ギリシャ内の国々（都市国家）が戦争と疫病で苦しみ、神託を仰いだところ、戦争をやめてオリンピアで祭典を挙行せよと告げられたことによるのでした。戦争と疫病の回避こそが、オリンピック誕生の背景でした。第1回古代オリンピックは紀元前776年、それから4年ごとに開催し、4年間を1オリンピアードとし、紀年法にも使われました。近代オリンピックにこの考えは受け継がれ、1896年からオリンピアードが数えられ、本年2020年は第32回オリンピアード初年に当たります。大会はオリンピアード1年目に行われるのですが、今回は例外的に2年目に行われることとなります。一方、古代オリンピックの紀年法に当てはめると、2021年は何と、第700オリンピアードの初年に当たります。オリンピックの長い歴史から俯瞰すると、まさに転換期に当たるのではないかと思います。このような歴史的な時に遭遇したのは幸か不幸かわかりませんが、今後、どのようなオリンピック・ムーブメントを考えていくべきなのか、コロナウイルスの襲来と共に考える時間を与えてくれたのかもしれない。

令和元年度スポーツ庁委託事業  
「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」 実施報告

CORE 事務局 真田 久、宮崎 明世、大林 太朗、鈴木 王香、福田 佳太

筑波大学（CORE）は、2015 年度よりスポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業（初年度は調査研究事業）」を受託し、東京 2020 大会に際する日本全国の「オリンピック・パラリンピック教育」の普及・促進を行っている。本年度は 3 大学（筑波大学、早稲田大学、日本体育大学）、45 地域拠点（全 67 自治体のうち）が参画し、本学では主に 15 地域拠点（宮城県、福島県、茨城県、群馬県、長野県、愛知県、京都府、和歌山県、島根県、山口県、徳島県、愛媛県、福岡県、京都市、北九州市）とともに事業を展開した（事業の背景および推進体制等については、本誌 vol.7（第 7 巻：pp.3-5）をご参照ください）。

本年度の本学における主な事業内容は、次ページの表 1 の通りである。全 4 回の「全国中核拠点会議」に出席し、スポーツ庁および関係団体（内閣官房オリパラ事務局、東京 2020 組織委員会、東京都教育庁、日本オリンピック委員会、日本パラリンピック委員会、日本財団パラリンピックサポートセンター、筑波大学、早稲田大学、日本体育大学）と情報共有を図りつつ、各地域拠点の指導主事等（コーディネーター）とともに教員研修会や各推進校の支援を行った。また、本学の附属学校群では、本誌に後述されるように様々な試みがなされた。

本来であれば、令和 2 年度は本事業の集大成となるはずが、新型コロナウイルス感染症の影響で大会自体が延期され、各地域拠点の推進校で計画されていた聖火リレーの観覧やホストタウン事業を通じた国際交流も保留状態となってしまった。しかしながらこのような事態は、あらためて国際的視野においてオリンピック・パラリンピックの価値を問いなおし、その課題を追究するという新たな学びを創出する機会にもなり得ると考えられる。延期後の 2021 年 7 月 23 日に大会が開幕することを期待しつつ、引き続き本事業の推進に努めていきたい。



全国セミナー  
(令和元年 5 月 14 日実施 於：筑波大学東京キャンパス文京校舎 134/116/117/118 講義室)

表 1. 令和元年度の主な事業スケジュール（筑波大学関係分）

実施時期	事業実績	備考
4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学内における推進体制の整備</li> <li>・各担当地域拠点との連携体制の整備</li> <li>・第1回全国中核拠点会議への参加</li> <li>・筑波大学附属学校群におけるオリンピック・パラリンピック教育のモデル授業研究・開発（～2月）</li> </ul>	
5月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全国セミナーの開催</li> <li>・各地域セミナーへの参加、実践支援（～10月）</li> <li>・各推進校等におけるオリンピック・パラリンピック教育の実践支援（～2月）</li> </ul>	
6月	(上記事項の継続)	
7月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第2回全国中核拠点会議への参加</li> <li>・平成30年度における「実践事例集」の発行</li> </ul>	
8月	(上記事項の継続)	
9月	(上記事項の継続)	
10月	・第3回全国中核拠点会議への参加	
11月	(上記事項の継続)	
12月	(上記事項の継続)	
1月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第4回全国中核拠点会議への参加</li> <li>・各地域ワークショップへの参加、実践支援（～2月）</li> </ul>	
2月	(上記事項の継続)	
3月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事業報告書冊子および事業報告用ウェブページの作成</li> <li>・委託事業完了報告書の提出</li> </ul>	

詳しい日程等の詳細は、COREのウェブサイトにおける事業特設ページ (<http://core.taiiku.tsukuba.ac.jp/consignment>) をご確認ください。

## クーベルタン・嘉納ユースフォーラム 2019 実施報告

筑波大学附属高等学校 中塚 義実

2019年12月21日(土)～22日(日)、筑波大学附属高校敷地内「桐陰会館」にて東京都高体連研究部と特定非営利活動法人サロン2002の共催で標記フォーラムが開かれた。

2015年から毎年開かれる標記フォーラムは、今回は2日間の通いのプログラムである。過去の参加校と東京都高体連研究部常任委員の勤務校を中心に10月に告知を開始。2日間のプログラムにすべて参加できることを条件として募集したところ、28名の生徒が参加した。

実り多い、有意義な2日間であったことは、生徒の感想から知ることができる。

**【目的】** 1. 2020年へ向けて高体連加盟校の生徒・教員が、1) オリンピック・ムーブメントやオリンピズムを理解し、2) 学校や競技種目を越えて人的交流をはかる。  
2. 2020年以降も高校生対象の国内ユースフォーラムを続けていくための組織づくりに貢献する。<sup>注1)</sup>

**【主催】** 東京都高等学校体育連盟研究部(東京都高体連研究部)<sup>注2)</sup>  
特定非営利活動法人サロン2002(NPO法人サロン2002)<sup>注3)</sup>

**【協力】** 筑波大学オリンピック教育プラットフォーム(CORE)

**【期日】** 2019年12月21日(土)～22日(日)

**【会場】** 桐陰会館(筑波大学附属中学・高校 敷地内)

**【参加者】** 高校生28名(筑波大附6名、附属坂戸4名、帝京6名、自由学園女子8名、都立府中東2名、クラーク記念国際2名)、スタッフ17名(NPOサロン5名、東京都高体連研究部5名、引率教諭5名、CORE3名、その他2名 一部重複あり)  
※原則として、東京都高体連研究部常任委員およびこれまで「クーベルタン-嘉納ユースフォーラム」に参加した学校から募集する。すべてのプログラムに参加できることを求める。

※顧問の引率は求めない。学校ごとに、校長印が押された参加者名簿を提出する。参加者はイベント保険<sup>注4)</sup>に加入する(保険料は主催者が負担)。

**【プログラムとスケジュール概要】**

## ◆12月21日(土)

14:30～15:00 受付

15:00～16:00 オリエンテーション「クーベルタンと嘉納治五郎」 中塚 義実(筑波大学附属高校)

16:10～17:00 講義① 東京2020大会の特徴 真田 久(筑波大学教授)

17:10～19:00 講義② 国際スポーツ大会におけるおもてなしの心 江上 いずみ(筑波大学客員教授)

19:00 解散

## ◆12月22日(日)

9:00～11:00 演習 グループ討議とポスター制作<NPO法人サロン2002/都高体連研究部>

11:10～12:00 実習 ボッチャ体験会 <NPO法人サロン2002>

12:00～13:00 昼食・休憩

13:00～15:45 第2回 NonBorder ボッチャ交流会<sup>注5)</sup> <NPO法人サロン2002>

15:45～16:00 クロージング

16:00 解散

**【参加手続き】** 「参加者名簿」を用いて各学校で取りまとめる(校長印必要)

**【参加費】** 無料(ただし「イベント保険」「ボッチャ交流会参加費」は東京都高体連研究部が支出)

＜ 注 一 覧 ＞

- 注1) 近代オリンピックの創始者の名を冠した「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（国際 YF）」が、CIPC（国際ピエール・ド・クーベルタン委員会）主催で2年に一度、開かれている。世界中から100名以上の高校生が集い、座学や討議、スポーツ交流やアート活動を通してオリンピズムを学ぶ機会である。日本からは2009年に生徒2名がオブザーバー参加して以来、毎回参加。2015年からは7名のフルメンバーが認められ、参加者選考を兼ねた「クーベルタン-嘉納ユースフォーラム（国内 YF）」が CORE や NPO サロン、JOA（日本オリンピックアカデミー）主催で開かれるようになった（2015、2016、2018年に開催）。このムーブメントを全国に広げ、末永く続けていくためにもさまざまな機関の連携は不可欠である。「続けていくための組織づくりに貢献する」ことを目的の一つに掲げ、東京都高体連研究部主催での国内 YF が企画された（2017、2019年に開催）。
- 注2) 東京都高体連加盟専門部の一つ。都内の高校運動部についての研究を推進するとともに、毎年「東京都高体連研究大会」を主催し、部活動の今後のあり方やオリンピズムについての普及・啓蒙をはかる。全国高体連研究部では同様に全国研究大会を開催。2020年1月の第54回大会では、東京都が課題研究「運動部活動が育むものとは何か―部活動の存在意義についての調査」を発表した。
- 注3) スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”を“志”に掲げる NPO 法人。その前身は1980年代のサッカー関係者の研究会にあり、1997年からサロン2002の名称で活動。月例会は2020年12月で通算280回を数える。2014年度に NPO 法人化。「オリパラ教育」事業や U-18 フットサル事業などに積極的に関わる。
- 注4) 損保ジャパン日本興亜の「レクリエーション補償プラン（行事参加者の傷害危険保証特約セット 普通傷害保険）」に加入。行事内だけでなく、自宅～会場間の移動についても補償される。
- 注5) 昨年度初めて実施された「Non-Border ポッチャ交流会」の第2回大会の第1部に「クーベルタン-嘉納ユースフォーラム2019」の高校生が参加した。一般参加者は12:30受付、13:00開会式、13:30～15:45第1部（参加申込単位でのリーグ戦）、16:20～17:30第2部（即席チームでの交流戦）、17:30閉会式。

昨年度の第1回大会の様子は、NPO 法人サロン2002のHPをご参照いただきたい。

[https://www.salon2002.net/src/pdf/monthly\\_report/2019/boccia201901.pdf#search=%27NonBorder%E3%83%9C%E3%83%83%E3%83%81%E3%83%A3%E4%BA%A4%E6%B5%81%E4%BC%9A%27](https://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2019/boccia201901.pdf#search=%27NonBorder%E3%83%9C%E3%83%83%E3%83%81%E3%83%A3%E4%BA%A4%E6%B5%81%E4%BC%9A%27)



【2日間の様子】

◆ 12月21日（土）

オープニングでコーディネーター（中塚義実）から「クーベルタンと嘉納治五郎の功績」の説明と「これまでの国際・国内ユースフォーラム」が紹介された。2019年8月にフランス・マコン市で開催された第12回国際 YF に参加した6名の生徒のうち4名が登壇し、スライドを用いて説明した。

CORE の真田久事務局長による「東京 2020 大会の特徴」の講義はクイズ形式で生徒に問いかけながら進められ、生徒も少しずつほぐれてきた。江上いずみ氏ははじめに簡単なゲームを取り入れ、初対面の生徒が交流できるよう促した。休憩後の「国際スポーツ大会におけるおもてなしの心」の講義は心温まるものであった。最後に東京都高体連研究部の庄司一也部長から全体を通してのコメントがあり、集合写真を撮って初日を終えた。



オープニング。緊張の面持ち



マコン（フランス）で開かれた国際 YF 報告



真田久氏の講義はクイズ形式で進められた



江上いずみ氏の講義はまずは Ice Breaking から



東京都高体連研究の庄司一也部長が初日の総括



初日の参加者で記念写真

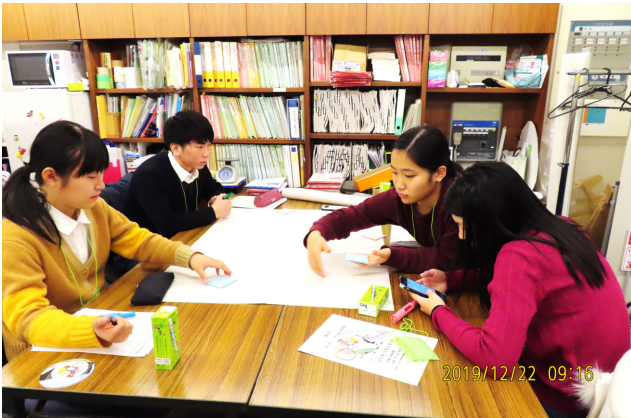
◆ 12月22日（日）

グループ討議のテーマ「共生社会」は前日に示され、各自が準備をして2日目に臨んだ。4～5名の5班に分かれ、議論の成果をポスターにまとめる。時間は短いが、各班とも意欲的に取り組んだ。

終了後はポッチャ体験会に参加。一般の参加者も徐々に集まり、ポッチャのゲームとボールづくりを体験する（通常の6球に加え、自作の7球目を採用）。

午後のポッチャ交流会には約150名が集まった。ナイジェリアやケニアからの参加者、車椅子の方、高齢者や幼児など、多種多様な人々が、文字通り「Non-Border」でポッチャを楽しんだ。討議のテーマである「共生社会」の実践の場となり、高校生にとって貴重な機会となった。

ポッチャ交流会の第1部をもってユースフォーラムを終えた。



「共生社会」についてグループで討議



ディスカッションの成果をポスターに反映



ポッチャボールを作るワークショップにも参加



高校生は初めてのポッチャに夢中！



優秀ポスターは「チームくぼ」に



総勢150名。「共生社会」の実践の場であった

【生徒の感想】 Google フォームを用いてアンケートを回収。14 名が提出。うち 4 名を抜粋。

- ・この 2 日間のユースフォーラムはオリンピズムを肌で感じるとてもいい機会でした。始めはどんなことをするのかドキドキでしたが、講義やスポーツ、ディスカッションを通して、多くの人と交流ができ、新しい繋がりが生まれました。特に印象に残っているのは、2 日目に行われた Non-Border ボッチャ交流会です。オリンピズムや共生社会について、言葉では理解していても、その環境の実現となると簡単にはいかない部分があると思います。ですがこの交流会は、様々な差異があっても、それを全く感じないような、賑やかで、楽しいスポーツ大会で、とても驚いたのと、良い経験になったとおもいます。とても濃い 2 日間を過ごせました。参加して良かったです（筑波大附）
- ・この 2 日間を通して、多くのことを学ぶことができました。まず、初日にはクーベルタンと嘉納治五郎、オリンピズムについて知識をつけることができました。その後の東京 2020 についての講話ではいよいよ近づいてきたと感じました。今大会から始まる多くのことにはとても興味が湧きました。その後の江上さんの講話では「その人にとっての一番は他の人にとっての一番ではない」という言葉やおもてなしの仕方。言葉の表現の仕方はとても勉強になりました。2 日目にはグループに分かれて「共生社会」についてのポスターを作成しました。初めての人とコミュニケーションをとるのは上手ではないのですが、せっかくの機会だったので積極的にディスカッションをしました。グループのみんながそれぞれ考える「共生社会」のために出来ることは本当に多種多様で、とても面白かったです。その中で我々のグループでは 1 日目の江上さんの中にもあった言葉の表現を変えることをできる事としました。1 日目からの学びを 2 日にもつなげることができ、とても良かったと感じました。午後のボッチャ交流会では様々なチームが参加していてとても楽しかったです。障がいの有無や国籍に縛られず試合を楽しみ、終わったらみんなで握手やハイタッチをする姿は今後の「共生社会」の達成への第一歩のように感じました。様々な事を学ぶことができた今回のユースフォーラム。この経験を自分の中だけに留めるのではなく、どんどん発信していければいいと思いました。（附属坂戸）
- ・全体を通して私が学んだのは、人と交流することの大切さだ。最初は他校の生徒たちとたったの二日間で本気の討議などできないに等しいと思っていた。しかし思いの外フレンドリーに優しく接してくれたことや、共生社会という題が興味のあることだったことから、最後には心からボッチャを楽しめるまでになった。人と自分から接するのが苦手な私にとって、とても貴重な経験となった。ボッチャでは、新鮮な考えにたくさん出会うことができた。今まで、スポーツは障がい・性別の関係のない自由な交流の場である、ということは分かっているつもりだったが、実際にやってみて、車椅子の小学生の方が上手だったり、外国の人のためらいのない投げ方に感動したりと、たくさんの刺激を受けた。冬休みの始まりに相応しい、素晴らしい二日間だった。これから、障害者施設でのボランティアなど、たくさんの経験をする。今回のフォーラムを通して深めたことを頭において、共生社会に向けた、見返りを求めない、自分にもできる運動を少しずつ進め、発信していきたい。（自由学園）
- ・スポーツを通して学べるのも知ることが出来ましたが、スポーツを通して繋がる事を今回学ぶことが出来ました。共生社会について考えた時に繋がりを感じました。外国の人でも障害を持っている人でも、苦手な事がそれぞれ違うのと同じ様に、それは私達の苦手となら変わりのない物だと感じました。またそこから、お互いを結ぶための方法や場所を考えた時にスポーツが、みんなを繋ぐ架け橋になってくれると思いました。こうやって話していくうちに、案外繋がりたいと思えば手段が身近にあり、それぞれがこうしたい、ああやりたいと思ったらどんどん行動に移して行かなくてはならないとも感じる事が出来ました。自分は、これからもっと障害を持っている人でも言葉少し分からない人でも過ごしやすい環境を作っていくために、交流するプロジェクトやイベントがあればどんどん参加していき、この考え方を共有していきたいと思いました。改めて、スポーツのある意味とスポーツを通して何ができるのか、また具体的に人を迎えるためには何をすれば良いのか考える事が出来ました。とても良い考えをみんなと共有出来たことを嬉しく思います。ありがとうございました。（都立府中東）

【総括および今後の展望】

- ・参加生徒・教員からの評価は、今回もすこぶる高かった。「オリパラ教育」は東京都内のすべての学校で実施されているが試行錯誤の連続で、2020 以降については未定である。「このようなことならぜひやってみたい」「今後も参加したい」の希望が強かった。
- ・2 日目の午前中に「共生社会」をテーマにグループ討議をしてポスターを作成し、そのポスターを午後のポッチャ交流会参加者に披露し、評価してもらった流れはよかった。生徒たちは驚くほど意欲的に取り組み、ポッチャ交流会への多様な参加者も興味をもって高校生のポスターに見入っていた。
- ・ポスター制作で考えたことが、午後のポッチャ交流会で実体験を通して感じる事ができた。ポッチャ交流会には年齢（幼児から高齢者まで）、国籍、障がいの有無を乗り越えた交流ができ、生徒たちも積極的に、日ごろ接することがない人々と積極的にかかわりを持つようとしていたのが印象的であった。
- ・東京都高体連研究部の主催事業ではあったが、生徒も教員も忙しいのか、常任委員の勤務校からの参加者が少なかった。一方で、過去の国内 YF に生徒を派遣して下さった学校は常連校となり、今回も参加されている。かかると、そのよさがわかる。どんどんかかわってもらいたい。
- ・告知が難しい。かかわった人の熱意に依存している。もっと組織的に展開していきたい。
- ・「日本ピエール・ド・クーベルタン委員会 (CJPC)」が 2019 年に発足した。国際 YF への生徒派遣や国内 YF の企画・運営については CJPC を中心に展開することになるだろう。高体連の組織力を生かしつつ、日本独自のオリンピック教育を 2020 年以降につなげていきたい。
- ・次回の国際 YF は 2021 年 8 月にキプロスで開催。派遣生徒の選考を兼ねて「クーベルタン-嘉納ユースフォーラム 2020」を 2020 年の年末に筑波大で開催予定。同時期に第 7 回 JOA ユースセッション in 中京大も開かれ、これらの参加者から国際 YF 参加者が選考される見込み。このムーブメントを全国展開したい。各地で取り組みが始まったのだから、この灯を絶やすことなく継続していきたい。2020 以降の「オリパラ教育」の担い手の一つとして、NPO 法人サロン 2002 も組織としての取り組みが必要。担い手としての体力も必要。ポッチャ交流会とも絡めながら多角的に展開していきたい。
- ・継続していく上で「信用・信頼」を得ることは必須。個人情報の管理は最低限守らねばならないし、健全な収支構造のもとで事業展開していくことも求められる。地道に進めていきたい。

注) 本報告は、主催団体の一つである「特定非営利活動法人サロン 2002」発行の広報誌『遊 ASOBI』第 3 号から多くを引用した。

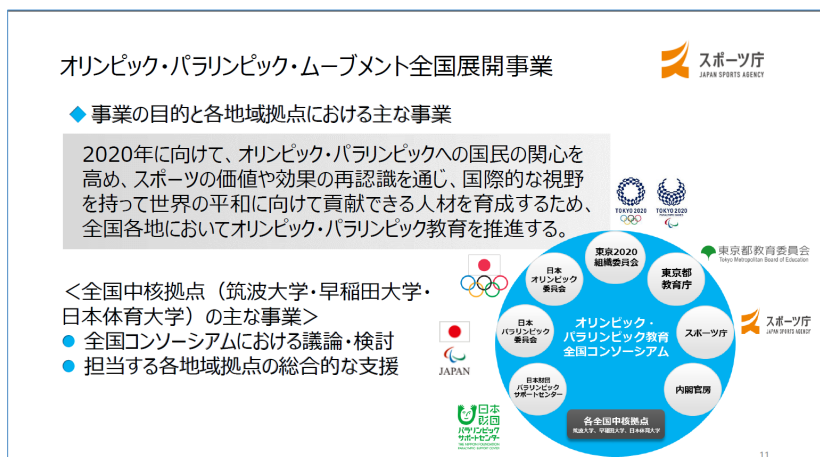
「日本体育科教育学会第24回大会ラウンドテーブル」 研究発表報告

筑波大学体育系、CORE事務局 宮崎 明世

令和元年7月7日（日）に白鷗大学で開催された、日本体育科教育学会第24回大会において「オリンピック・パラリンピック教育をレガシーとするために」のテーマでラウンドテーブルの話題提供を行った。発表は、オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業（以下、本事業と示す）の3つの拠点大学が共同で行い、COREから宮崎、大林、鈴木、福田と早稲田大学の岡田悠佑研究員、日本体育大学の乳井勇二研究員で話題提供とディスカッションを行った。

はじめにオリンピック・パラリンピック教育の意義や東京2020大会を契機に進められている本事業の概要を説明し、本事業のこれまでの実践例を紹介した。体育科・保健体育科における実践例では、オリンピック・パラリンピック教育が、学習内容として位置付けられること、さらに教材としても活用できることを示した。中高の体育理論の例として、教科書に直接明記された単元以外にも、オリンピック・パラリンピックに関連させた教材づくりが可能な単元が多くある。また、各運動領域においては、フェアプレイを重視した学習や、「見る」、「支える」、「知る」を重視した実践例を紹介した。ディスカッションでは、参加者からシッティングバレーの実践報告などがあった。

次に、総合的な学習の時間や道徳など、その他の教科や学校行事などでの実践例を紹介した。総合的な学習の時間では、教科を超えた取り組みや、調べ学習や学校を離れて行う体験や実践が行い易く、成果発表にもつなげやすい。運動会の工夫や聖火に関する学習、地域の伝統を生かした実践例を紹介した。これまでの実践から学校現場では、新たな課題を取り入れることへの負担感があるが、実際にやってみるとさまざまな効果を感じられること、長期的な計画を立てにくいことなどの課題があることも報告した。当日は残念ながら参加者が少なかったが、今後も継続してこのような機会を生かして発信していきたいと考えている。



発表資料：オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業の概要

【 体育科・保健体育科とオリンピック・パラリンピック教育の関連付けの方向性 】

オリンピック・パラリンピックについての学び

① 体育理論領域：オリンピック・パラリンピックに関連する単元の実践の充実

オリンピック・パラリンピックを通した学び

② 各運動領域：オリンピック・パラリンピックを活用したフェアプレイ等のスポーツの価値の学習  
バラスポーツの教材化、発達段階に応じたバラスポーツの取捨選択

③ 体育理論領域：オリンピック・パラリンピックに関連する単元以外の単元における  
オリンピック・パラリンピックを活用した実践の検討

発表資料：体育・保健体育科とオリンピック・パラリンピック教育の関連付け（岡田、乳井）

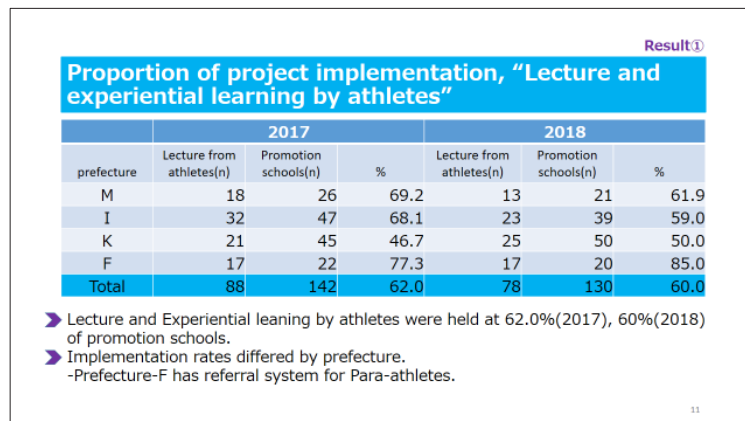
「日本スポーツ教育学会第 39 回学会大会」 研究発表報告

筑波大学体育系、CORE 事務局 宮崎 明世

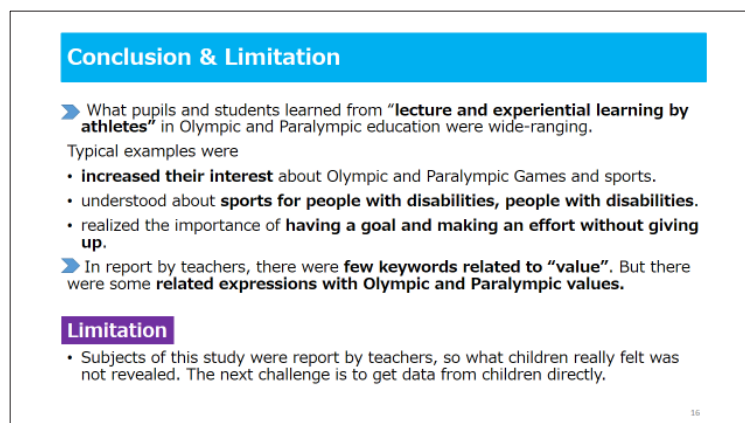
令和元年 9 月 22 日（土）、23 日（日）に早稲田大学で開催された、日本スポーツ教育学会第 39 回学会大会と同時開催された East Asia Alliance of Physical Education (EAAPE) において、“A Study of achievement from Olympic and Paralympic Education for Tokyo 2020 : Focus on Lecture and Experiential learning by Athletes” のタイトルで口頭発表を行った。

本研究では、これまでのオリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業の実践の中で最も多く行われている、オリンピックやパラリンピアンなどアスリートによる講演や実技講習などに焦点を当て、その実態と成果について明らかにしようとした。対象は、2017 年と 2018 年に本事業に参加した 4 つの自治体の推進校のうち、アスリートの講演や実技指導を行った、合わせて 272 校とした。対象校の報告書の記述からその成果に関するものを抽出し、KH Corder 2 (2017) を用いて質的に分析した。最も多く挙げられた成果は、「オリンピックやパラリンピック、スポーツに関する関心が高められた」で、「障がい者や障がい者スポーツに対する理解が深められた」、「オリンピックやパラリンピックを身近に感じる事ができた」、「共生社会の実現に向けての気づきが増した」、「目標を持ちあきらめずに努力することの大切さに気付いた」などが挙げられた。記述の中でも価値に関する記述を抽出したところ、多く挙げられたキーワードは「努力」で、「敬意」や「勇気」なども挙げられた。本研究の結果から、アスリートによる講演や実技講習などの活動による成果が明らかになった。しかしながら、本研究の対象は教師が書いた報告書であり、成果を明らかにするためには児童生徒を対象とした調査が必要であると考えられる。

発表後には本事業の具体的な展開の仕方や、活動内容についての質問があった。海外からの参加者から多くの反響があり、日本におけるこのような取り組みを海外に発信することは意義があると考えられる。



発表資料：アスリートによる講義・実技指導の形式と実施数（2017、2018）



発表資料：結論と今後の課題

「日本体育学会第70回大会」 参加報告

筑波大学体育系、CORE 事務局 鈴木 王香

2019年9月10日（火）～12日（木）に慶應義塾大学にて日本体育学会第70回大会が開催され、ポスター発表を行った。

題目：「スポーツに対する興味関心・楽しむ心の育成に着目したオリンピック・パラリンピック教育の実践－オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業の事例－」

2020年東京オリンピック・パラリンピック（以下：東京2020大会）に向けて、全国各地ではオリンピック・パラリンピック教育（以下：オリパラ教育）を推進する事業が進められている。スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」では、オリパラ教育における学習テーマのひとつに「スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成（以下：テーマ5）」を設定している。本報告は、平成30年度の筑波大学担当地域拠点（12地域262校）を対象に、テーマ5のもとで行われた実践を調査・分類することで、今後のオリパラ教育に関する知見を得ることを目的とした。

平成30年度の推進校の事業実施報告書によると、テーマ5で実践を行った推進校は175校にのぼり、テーマ内で最も多かった（複数の実践内容で同一のテーマが設定されていた場合は1カウントとして集計した）。その実践内容としては、「アスリート・関係者招聘（講演、体験、教室）」が186と最も多く、次に「オリパラ競技・スポーツ体験」と続いた。

ポスター発表では、本事業の概要とともにこれらの結果について報告した。参加者とのディスカッションでは、東京2020大会終了後は謝金等がかかる講演は実施できなくなる可能性が高い中、オリパラ教育をどのように学校教育で活かしていくか、どのように教科に落とし込むか（教材にまとめる重要性）等が課題としてあがった。また、児童生徒に対して「スポーツへの興味関心が高まる」実践を行うことはオリパラ教育に関わらず重要な視点であることから、テーマ5の実践については今後につながる可能性が示唆された。

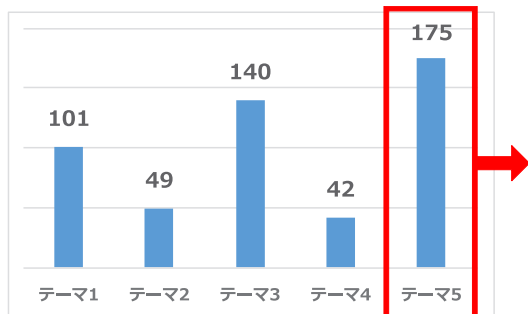


図1 テーマ別における実践校数

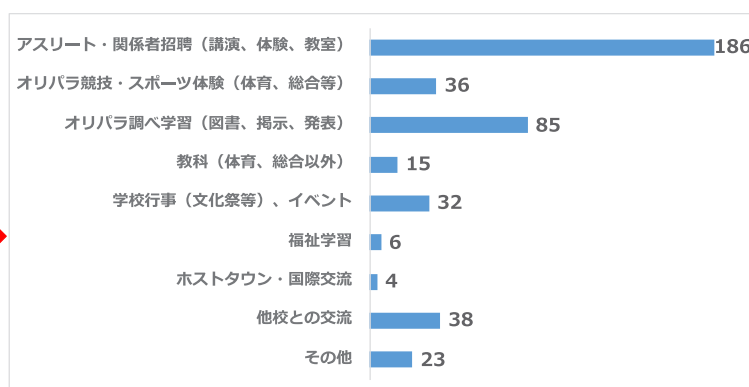


図2 テーマ5の実践における分類

1. 「アートメダルに触れよう」第6学年 鑑賞・工作（焼き物）

はじめに

日本国民として、さまざまなグローバルな視点を持った将来の姿を見据えた教育が必要と考える。東京オリンピックを間近に控え、学校現場では各教科領域において関連した実践がなされている。取り組みを通して子どもたちにスポーツそのものの魅力や人間の可能性を感じさせ、また平和な国際社会を目指す心身共に豊かな育ちを目指している。図画工作科においては子どもたちの興味関心を元に、メダルを中心としたベクトルから授業を構成した。その歴史、またアートメダルという領域から、その世界的な価値や創造的活動の広がりにも触れさせることで、前述したねらいにつなげたいと考えた。実践は四校研において、鑑賞を基にした系統的なカリキュラム作りの試みの一貫である。今年度は6年生での取組とした。



アートメダルを知る

題材について

(1) 題材名 「アートメダルに触れよう ～自分なりのアートメダルの構想～」

(2) 題材目標

- ① アートメダルに触れ焼き物で創作する活動条件からさまざまな可能性を試し、自分なりの根拠に基づいた考えを作品を通し仲間に提案することができる。
- ② アートメダルについて知ったことから、そのよさを基に発想・構想し、焼き物で創り出すことを通し、造形的な見方・考え方を広げることが出来る。
- ③ アートメダルの実物を相互鑑賞し合う中互いの想いを繋げ、表現に活かすことができる。互いの作品を評価し合い、感じたよさから更に違う提案を模索する。

(3) 準備…アートメダル等の実物（本実践では山田氏のコレクションを提供）、信楽粘土、彫塑道具一式

(4) 実践での子どもたちの姿から

日本金属工芸研究所代表取締役である山田敏晶氏を講師にお願いした。山田氏からは、メダルとお金の違いやその価値など、現代のアートメダルにつながる歴史なども含め、子どもたちにお話し頂き、創作意欲につなげさせた。山田氏のコレクションを実際に手に取って見せてもらった子どもたち。メダルといえば金メダル銀メダルなどスポーツでの賞、あるいはイベント等の記念の証などのイメージであり、形も当然丸でと思っていたのだが、形や色などは勿論、素材も含めて元々はさまざま広がりがあることを学ぶことができた。創作ではこれまで培った焼き物の技能を生かし、思い思いの意味を込めて創る姿となった。家族に感謝の気持ちを込めたり、平和や環境などグローバルな課題を取り入れた意味、技術的には型を生かしたり支えを上手く取り入れるなどし、より抽象的な面白さを楽しむ高学年らしい作品が見えた。実践は2月末までの報告である。



実物に触れる



アートメダルを創る



子どもたちのアートメダル

3月、学校が休校措置を取らざるを得ない状況となったため、色付け・本焼きなど何とか子どもたちの想いを遂げさせてやりたい。



## 2. 「オリンピック会場の下見で盛り上がる」全学年

全校を対象に、東京オリンピック・パラリンピックの会場を順番に見て回るという朝会を行った。体育科の齋藤先生が、事前に東京で行われる会場をすべて回り、写真や動画を撮影した。

準備のできている会場とまだまだできていない会場をそのまま紹介し、着々と準備が進められていることを子どもたちに紹介した。また、その会場ではどのような競技が行われるのかも紹介した。

子どもたちは、それぞれの会場の今の様子を知ることによって、これからさまざまなドラマが起きるであろうことを想像し、大会本番へ向けて気持ちを盛り上げることができた。

また、体育科の齋藤先生が、自分自身のオリンピック・パラリンピックとの関わり方（選手として参加する、チケットを買って見に行く、以外）を語ることで、全校の子どもたちにもどのように関わっていくのかということを考えるきっかけをつくることができた。



オリンピック会場を知る



話に夢中になる子どもたち

## 3. 「お祭りでオリ・パラ」全学年

毎年開催される若桐祭というお祭りの中で、オリンピック・パラリンピック関係のイベントを2つ開催した。

### ①いろいろなボールでポッチャ

子どもたちに車いす体験やパラ・スポーツを楽しむことを通して共生社会への気づきにつなげたいという意図で行われた。

ボールを正式なボール、軍手を丸めたボール、テニスボール、玉入れのボールなど、いろいろな種類のボールから選んでゲームを行った。車いすの準備をして、希望する子には車いすからボールを投げる体験もした。



いろいろなボールでポッチャ

### ②安全ピンで国旗ビーズ

iPadを用いた「ドット絵マーカ―」というアプリを使用し、安全ピンにどのようにビーズを入れていったらいいのかという製作図を作り、安全ピンに色ビーズを通す。11本の安全ピンを使い、並べると国旗の絵柄となるようにする。国旗によって難易度が変わってくるので、子どもたちが選べるようにした。



安全ピンで国旗ビーズ

また、世界地図で選んだ国旗の場所や、その国のあいさつの言葉なども調べてわかるようにした。



完成した国旗ビーズ

## 1. 背景

2020年東京オリンピック競技大会、パラリンピック競技大会を控える中でオリンピック・パラリンピック教育の全国的な取り組みの必要性が求められた（文部科学省、2016）。そこではスポーツの価値、オリンピック・パラリンピックの理念とオリンピック・パラリンピック教育の意義、オリンピック・パラリンピック教育の具体的な内容が示された。そこで本校ではスポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築、スポーツに対する興味・関心の向上（スポーツ庁、2019）に焦点を当てて実施を計画した。本実践の独自性としては様々な事例からオリンピック・パラリンピックを捉えることを意図的、計画的に実施したことである。

## 2. 目的

したがって多種多様なオリンピック・パラリンピック教育を展開することを本実践の目的とした。そのための各取り組みを以下のように設定した。

事例1：運動会における聖火リレーの実施

事例2：附属間の連携事業「ブラインドサッカー観戦及びアシスタント」

事例3：横断的オリンピック・パラリンピック教育

事例4：オリンピック・パラリンピック教育の講師招聘

## 3. 対象生徒

全校生徒 613名（1年生 205名、2年生 208名、3年生 200名）

## 4. 取り組み内容

事例1：運動会における聖火リレーの実施

東京2020大会の聖火リレーが行われることをふまえ、東京2020聖火リレー×教育プログラム（東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会、2019）をもとに聖火リレーの意義や目的を学び、実際に経験できるように運動会で聖火リレーを計画した。当日はリレー形式ではなく、開会式の祭典性を踏まえた聖火の入場を果たした。

事例2：附属間の連携事業「ブラインドサッカー観戦及びアシスタント」

筑波大学のオリンピック・パラリンピック教育推進事業の一つとして附属視覚特別支援学校の協力のもと附属間の連携事業としてブラインドサッカー観戦及びアシスタントを実施した。

事例3：横断的オリンピック・パラリンピック教育

オリンピック・パラリンピック教育にはオリンピック・パラリンピックそのものについての学びとオリンピック・パラリンピックを通しての学びがあり、今年度の各教科等での具体的な取組をまとめる。

事例4：オリンピック・パラリンピック教育の講師招聘

昨年度、本校においてオリンピックを招聘したことを踏まえ、障害を含めた多くの国民の生涯スポーツを支える、創る視点から義肢装具サポートセンター研究室長の白井二美男さん、パラ陸上選手河内広樹選手、イラストレーター須川まきこさん、パラリンピックを通してスポーツの意義や価値、障害理解等の内容で天摩由貴選手を招聘した。

事例4-1

義肢装具サポートセンター研究室長の白井二美男さん、パラ陸上選手河内広樹選手、イラストレーター須川まきこさん招聘

実施日時：令和2年2月7日

対 象：第1学年生徒（205名）

講演内容：義肢装具サポートの仕事内容等を中心にサポートするということとはどのようなことか、実際に義足の装着方法を見て、装着後に試走、歩行も見れる機会となった。河内広樹選手、須川まきこさんには義足になった経緯や自分の仕事などパラスポーツを身近に捉え、障害について考える機会となった。

#### 事例 4-2

天摩由貴選手（ロンドン、リオパラリンピック出場）招聘

実施日時：令和2年2月14日

対 象：第1、2学年生徒（413名）

講演内容：パラリンピアンとしての生活や競技をはじめのきっかけを自分の生い立ちから公演いただいた。自らの経験をもとに話されるのでパラリンピックのすばらしさだけでなく、出場までの過程や苦悩など生徒自身の生活での身近に感じられる機会となった。

## 5. 成果及び課題

### 事例 1：運動会における聖火リレーの実施

本校の秋季大運動会の開会式で5クラス代表の生徒が聖火を掲げ、入場し、オリンピック・パラリンピックを意識した開会式のセレモニーを行った。聖火を掲げている代表生徒の表情は凛としてフェアプレイやスポーツマンシップに則った運動会になることが伝わってきた素晴らしい開会式であった。



### 事例 2：附属間の連携事業「ブラインドサッカー観戦及びアシスタント」

附属視覚特別支援学校の協力を得て、ブラインドサッカー日本代表とフリーバードめじろ台の試合観戦及びアシスタントを附属中学校の生徒が担当した。対象者は2年総合学習でオリンピック・パラリンピックの分野を選択している生徒である。オリンピック・パラリンピックに強く興味関心を持っている彼ら彼女らに附属視覚特別支援学校の山本教諭協力のもとブラインドサッカーの実技及び講義を事前指導として2時間行った。当日は選手との交流、アイパッチの装着の手伝いや本部の手伝い、ボールボーイと様々な内容を体験した。



### 事例 3：横断的オリンピック・パラリンピック教育

#### ①保健体育科のボッチャ実践

中学3年生の授業でパラスポーツの体験としてボッチャを実践した。性差、技能差を越え誰もが楽しめるスポーツであると同時に取り組みやすい種目であった。正規のルールではなく、手が使えないという想定により足でボールを蹴るなど制限を加えて実践した。生徒は思うようにコントロールできないことが新鮮で良い体験の機会となった。

#### ②数学科

ボッチャを通じた数学科の統計の授業を実践した。ジャックボールと呼ばれる親玉にどれくらい近づけられるかをデータから傾向を探り、分析し、活用する方法を考察した。実際に体を動かしながら生徒たちは理論と実践を体験することができた。

③総合的な学習（中学1年生）

「立場をこえて、広がる輪」という障がい者理解をテーマに1学年全体でボッチャ、車いす体験、手話、高齢者体験、点字体験とそれぞれのブースで体験会を行った。当日は学級委員が指揮を執り、グループごとに分かれた生徒は時間でそれぞれの活動をローテーションし、全生徒が取り組める内容とした。

④総合的な学習（中学2年生選択）

「オリンピック・パラリンピックを科学する」というテーマで16時間の活動を行った。ブラインドサッカーの実技（附属視覚山本先生を講師で招き）、ゴールボールの体験、オリンピックセンター訪問など体験を伴う活動を通して文化的背景や大会を多角的に捉える視点を習得することができた。

事例4：オリンピック・パラリンピック教育の講師招聘

事例4-1

義肢装具サポートセンター研究室長の白井二美男さん、パラ陸上選手河内広樹選手、イラストレーター須川まきこさん招聘

鉄道弘済会義肢装具サポートセンター研究室長の白井二美男さん、パラ陸上選手河内広樹選手、イラストレーター須川まきこさんをお招きし、講演会を実施した。白井氏は仕事内容や義肢装具に対する想い、考えを中心に講演をした。河内選手は実際に普段着用している競技用の義足に変え、ジャンプや走る姿を実際に見せた。須川氏はイラストレーターという仕事や普段の生活まで幅広い内容で講演した。河内選手、須川氏は自身の義足になった経緯や実際に義足や歩行姿勢を見せることにより、生徒がスポーツという側面だけではなく、支える人の視点で義足や障がいを考える機会となった。最後は有志の生徒による義足を体験する時間が設定され、義足を使用している方により近づいた体験活動ができた。



事例4-2

天摩由貴選手（ロンドン、リオパラリンピック出場）招聘

パラリンピアン为天摩由貴選手を招き、講演会を実施した。天摩選手はパラ陸上での活躍や現女子ゴールボール日本代表キャプテンということもあり、様々な経験から中学生にたくさんのメッセージをくださった。パラリンピックの理解だけに留まらず、視覚障害のことについて日常生活の様子や生い立ちまで多岐にわたる内容であった。特に「チャンスは今みなさんの足元にあるかもしれない」というメッセージから、生徒自身の可能性やチャンスなど自分の目標を持つことの重要性、チャレンジすることの大切さを学んだ機会となった。



6. 引用参考文献

文部科学省（2016）オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて 最終報告

[https://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/shingi/004\\_index/toushin/\\_icsFiles/afeldfile/2016/07/29/1375094\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/004_index/toushin/_icsFiles/afeldfile/2016/07/29/1375094_01.pdf)（閲覧日：2020年2月27日）

スポーツ庁（2019）平成30年度スポーツ庁委託事業 オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業 実践事例集

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会（2019）東京2020聖火リレー×教育プログラム。 <https://education.tokyo2020.org/jp/participate/programmes/torchrelayreport/>（閲覧日：2020年2月27日）

## 附属高等学校

筑波大学附属高等学校 鮫島 康太

### 1. 日常の活動として

保健体育科を中心とする日々の授業や学校行事、部活動等、学校における教育活動全般にわたって「オリビズム」を学ぶ姿勢は、嘉納治五郎校長の頃から本校が取り組み、いまま受け継がれている。とくに保健・体育理論の授業では、オリンピック・パラリンピックを題材にした授業や、それに付随する様々な問題を取り上げて生徒に思考させる授業が行われ、生徒の問題意識を育む貴重な場となっている。様々なスポーツ場面を身近なものとしてとらえ、そこから多くのことを感じ学ぶ姿勢を養うことがオリビズムであると考えれば、本校で行っている「スポーツ大会」、学校をあげて戦う他校との「総合定期戦」なども、オリパラ教育の代表的な一例として挙げることができる。今年度も生徒が中心となって準備・運営し、互いに応援し合いスポーツを楽しむ場面が多く見られた。持続可能なオリンピック教育として、従来より最も力を入れている「柱」である。



### 2. 筑附スタディとしての取り組み（総合的な探求の時間）

SGH 事業を終えた現在、その取り組みは「筑附スタディ（総合的な探求の時間・土曜日実施・2 単元）」と名称を変えて継続している。一年次では研究調査に関する手法（データ収集、統計など）を学習する。二年次で課題研究を行い、最終的に論文を作成するというものである。

二年次の大まかな流れは、4月にオリエンテーション、5月に研究グループ形成とテーマの焦点化を行い本格的な研究活動に入った。1月末に論文を完成させ、2月には報告会を行うことで課題研究の締めくくりとした。

今年度設定されたテーマの一つは「スポーツを通じた障がい理解～誰もが生きやすい社会をつくるために～」であった。

### 3. 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム、および国内クーベルタン・嘉納ユースフォーラムへの参加

近代オリンピックの創始者クーベルタンの思想ーオリビズムーを教育理念に掲げる「クーベルタン・スクール」が2年に一度集まる国際フォーラムが、8月24日～31日、フランスのマコン市で開かれた。6名の日本代表に、本校からは2年生の女子2名が選ばれた。5大陸23ヶ国から集まった約120名の高校生は、スポーツやアート活動、オリビズムについての討議や知識テストなどの課題に取り組み「クーベルタン賞」を目指す。さまざまな国の人たちとの共同生活を行い、異文化理解に大きく役立った。

また、12月に行われた国内クーベルタン・嘉納ユースフォーラムへは、1年生男女それぞれ2名、2年生女子2名が参加した。

### 4. ゲストティーチャーによる授業（保健・体育理論）

パラアスリートの石井亜弧氏（柔道、三井住友海上あいおい生命）を招聘し「視覚に不自由がある人をサポートするには」という題材で授業を行った。一向に絶えない視覚障害者の交通事故（例：駅のホーム転落事故）などを受け、「気軽に一言声をかける」ということが、一つの「困った」を解消するだけでなく、人の命を助けることにも繋がるということの理解を促した。



## 附属駒場中・高等学校

筑波大学附属駒場中・高等学校 登坂 太樹

### (1) TIAS 主催「筑波大の留学生とオリンピック・パラリンピックを学ぼう！」

田原淳子氏（国士舘大学教授）は公益財団法人日本オリンピック委員会のホームページで「IOC は、近年、オリンピックの価値を卓越性（Excellence）、友愛（Friendship）、尊重（Respect）という3つのキーワードで表現し、世界の若い人々がこれを頭で理解するだけでなく、身をもって行動することを求めています。オリンピズムが個人から社会へ、国や地域へ、そして世界へと、言葉だけでなく実践を伴って深く浸透（人類にプラスのレガシーを～オリンピックの素晴らしさ～より引用）」していくと述べている。本校のオリパラ教育ではこの3つのテーマに沿って活動を行っている。その一貫として昨年度の3月8日（金）にTIAS主催の『筑波大の留学生とオリンピック・パラリンピックを学ぼう！』と題しオリンピック精神の浸透のための企画を行った。生徒は中学生の13名が集まり本企画を実施した。先述の「卓越性」「友愛」「尊重」に加えて、本質的価値を体験するためにIOCが設定した5つの教育テーマ（努力から得られる喜び、フェアプレー、敬意／尊敬の実践、卓越性の追求、身体・意志・精神のバランス）の3つのグループに分けてそれぞれのグループで簡単なゲームを通してオリンピックの価値について学んだ。



### (2) 「使い捨てプラスチックを再生利用した表彰台プロジェクト ～みんなの表彰台プロジェクト～」への参加

本企画は「東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会は、P&G社の協力の下、みなさまのご協力で集められたプラスチック空き容器と、海洋プラスチックをリサイクルし東京2020大会の表彰台を製作します。（みんなの表彰台プロジェクト実行委員会HPより）」のコンセプトのもと実施されている。この企画では「表彰台は約100セット作られ、45トンのプラスチックが必要。骨組みで使うアルミ材の一部は、東日本大震災の被災地の仮設住宅で使われたサッシを再利用（朝日新聞DEGITL2019年6月11日記事より）」されるというものである。

本校生徒の1人がこの企画に関連する企業の方との知己を得て、生徒が自主的に動き出した活動である。始業前の時間を利用して使い捨てプラスチックを回収し合計で5kgのプラスチックが収集された。



### (3) ボッチャ体験会の開催

本年度予算で購入したボッチャセットを使いボッチャ体験会を開催した。「ボッチャは、脳性まひなどの比較的重い運動機能障害がある人のためにヨーロッパで生まれたスポーツ。試合は対戦形式で、1対1の個人戦と2対2のペア戦、3対3のチーム戦がある。6個のボールを順番に投げて、ジャックボールと呼ばれる白いボールにいかにか近づけるかを競う（NHK HP 東京2020パラリンピックより引用）」競技である。2016年リオデジャネイロ・パラリンピックでの銀メダルを獲得したことは記憶に新しい。

最初、生徒はボールを初めて持ったこともあり戸惑っていたが、ボールの特性（グリップ力があり握りやすく飛距離アップが可能である、均等で丸みがあるのでコントロールしやすい。ボッチャ用具総合メーカーHPより引用）を掴んでいくうちに、操作性が向上してきた。

生徒の感想では「思い通りに投げられたときは嬉しい。」「相手のボールに自分のボールをあてて有利な立場になったときの優越感が良い。」「最後の一球で大逆転があるところが面白く、気が抜けない。」などの声があった。



## 附属坂戸高等学校

筑波大学附属坂戸高等学校 藤原 亮治

### ① 附属特別支援学校とのスポーツ交流学習

今年度から特別支援学校とのスポーツ交流学習を2校で実施した。異なる障がいを抱える同世代のアドバイスによって、ユニバーサルスポーツ開発に向けた生徒の学習理解度は飛躍的に向上したことが印象的であった。今後、持続的な授業のありかたにむけ、地元学校との協働も視野に入れながら継続実施を検討していく。

#### i 大塚特別支援学校とのサマーキャンプ

筑波大学の支援を頂き、初回交流を実施。非常に充実したプログラムの中で親睦を深めた。

#### ii 大塚特別支援学校とのスポーツ交流 in 坂戸

考案したスポーツを実施し、それぞれのグループで意見交換を行った。

#### iii 桐ヶ丘特別支援学校とのスポーツ交流

昼食を食べた後に、スポーツ交流を実施、グループごとに改善点などをディスカッションした。

#### iv 共生シンポジウムでのスポーツブース運営

附属学校群の児童生徒・保護者総勢100名を超える参加者に12名の生徒が開発スポーツを提供開発されたスポーツの変遷



開発直後 (ii 大塚交流)



道具の開発



桐ヶ丘との交流学習 (試作スポーツ試行)



桐ヶ丘との交流学習 (ディスカッション)



共生シンポジウム スポーツブース準備



共生シンポジウム (創作スポーツ披露)

### ② 授業におけるパラリンピアン教材化 科目「保健」

株式会社 WOWOW さんの協力のもと、IPC との協働製作ドキュメンタリー「WHO I AM」を教材に保健「自己実現と健康」の授業の作成を行った。



車いすフェンシング

ペアトリーチェ・ヴィオ (イタリア) のドキュメンタリーを20分視聴し、自己実現におけるエゴとマネジメント、他者との関係性に関してディスカッションした。





科目「介護福祉基礎」

埼玉県生涯福祉課とケアイスター不動産(デフサッカー日本代表2名・パラバドミントン1名)の協力のもと、パラスポーツ体験を実施。障がい者スポーツの卓越性への理解とユニバーサル・スポーツ開発に向けた福祉的視点の醸成に協力いただいた。



③ 生徒のオリンピック・パラリンピックに関連するソーシャルアクション/学習機会のサポート

(1) 「ノーバリアゲームズ」参加および成果報告

株式会社 WOWOW が主催するノーバリアゲームズへ参加、その成果発表として文化祭で「ノーバリアゲームズ in つくさか」を開催。同時に、WOWOW から提供いただいたパネルや映像の展示を行った。



車いすバスケットボールの神様パトリックと本校生徒



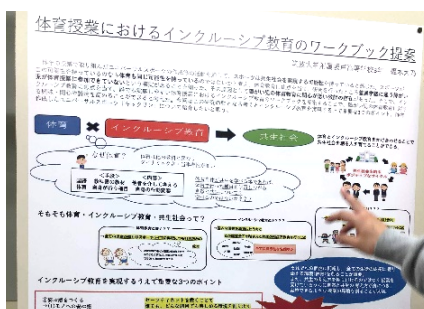
ノーバリアゲームズ in 筑坂

(2) クーベルタンニュースフォーラム参加者の情報発信

- クーベルタンニュースフォーラムに参加した生徒が学年集会において、現地での活動の様子などを報告
- 文化祭で活動をポスター発表
- ESD 国際シンポジウムや外部機関での発表

(3) 未来の体育を共創するサミットへのパネリスト登壇およびポスター発表

25 都道府県 200 名の小～大学教員およびスポーツ関連企業・関係者が集うサミットにおいて、本校生徒がシンポジストとして登壇。1 名が3 年次の体育活動をもとにした卒業研究のポスター発表を行った。



(4) 2 年次プロジェクト学習のサポート

生徒の探究活動に関して必要なスポーツ用具を貸し出すとともに、活用の方法などのレクチャーを行った。

サポート団体例

- 放課後児童センターのスポーツ機会創出
- アダブテットスポーツ普及支援 (他2 団体)

## 附属視覚特別支援学校

筑波大学附属視覚特別支援学校 山本 夏幹

### (1) はじめに

本実践は本校を拠点に活動するブラインドサッカーチームの free bird mejirodai（以下、fbm）とブラインドサッカー日本代表とのエキシビジョンマッチを開催し、サポートとして参加する生徒が競技運営に携わったり、試合を観戦することでブラインドサッカーの魅力に触れ、競技への関心を高めることやブラインドスポーツを観戦する際に注意すべき点を学習すること、選手との交流イベントを通じて視覚障がい理解の促進を図ることを目的に実施された。

### (2) 事前指導

本実践の参加対象である附属中学校第2学年27名に対し、ブラインドサッカーの紹介と試合観戦に際する注意点や当日競技運営でサポートしてもらう内容について指導を行った。また視覚障がいに関する基礎的な知識について説明を行った。指導の後半では視覚に障がいがある人に対する支援（手引き歩行や視覚情報の伝え方）について実践し、「見えないこと・見えにくいこと」への理解を深めた。

さらに本実践を広く周知し、ブラインドサッカーへの興味関心を高めることを狙いとしてポスターを作成し、各附属学校および筑波大学へ配布した。本ポスターは附属聴覚特別支援学校より紹介を受け、北海道高等聾学校へ作成依頼し実現することができた。



告知ポスター

### (3) 選手との交流およびエキシビジョンマッチでのサポート

エキシビジョンマッチ当日は6名の生徒がサポーターとして参加した。参加生徒は事前指導で行ったアンケートから、オリンピックやパラリンピックへの興味関心が高く、選手との交流やオリンピック・パラリンピックのボランティア活動にも積極的に参加したいという意欲のある生徒だった。

はじめにサポート内容の一つであり、ブラインドサッカーの試合を行うにあたって必須であるアイパッチの貼り付けの練習を行った。実際に人に対して行うことははじめてで慣れない様子であったが、本番で上手に貼り付けるためのイメージをつくることができた。

次に参加生徒と fbm の選手（7名）、附属中学校の秋山先生にもご協力いただき、混合のチームを編成し交流イベントを実施した。イベントを通じて選手との距離が縮まり、目的にもある通り、視覚障がいへの理解を深めることや実際に接したことがないという点において抱きがちな心理的な隔たりを少なくすることができたと考えた。

交流イベント終了後は試合前の準備となり、キックオフ直前に行われるアイパッチの貼り付けも練習通りに行うことができていた。試合中は試合運営の中心的な役割でもあるオフィシャルのメンバーとして活動したり、ボールパーソンとして競技の



交流イベントの様子



アイパッチを貼る様子

サポートを行ったりしながら目の前で繰り広げられる激しい試合を観戦してもらった。生徒たちが想像していた以上に選手同士の競り合いの激しさや声によるコミュニケーションの質の重要性など、映像を見て感じたことよりも細かなところまで感じ取ってもらえたと思う。



ゴール前のFK



ボールパーソン

#### (4) おわりに

本実践は事前指導を受けた生徒や実際に現場でサポートした生徒たちに対して、ブラインドサッカーの競技としての魅力や面白さを感じ取ってもらうことや視覚障がいへの理解促進を図ることを目的とした。成果について、参加生徒6名を対象に実施した事後アンケートの内容を一部抜粋して考察したい。

##### ●選手の様子、競技を見ての感想

- ・思ったよりもスピーディーで、激しく、臨場感があって、とても面白かった。また、選手やコーチは声かけをしっかりと行っていた。
- ・(前略) ゲーム前の交流イベントでも初対面ではあったけど楽しくできたし、視覚という壁を前までは大きく感じていたけど、実際に話してみると一気にその壁がなくなった感じがしたし、シンプルに楽しむことができた。
- ・すごく静かな試合になると思っていたが、選手同士ではすごく声を出し合っていた。
- ・(前略) 選手と一緒に走った時、スピードが速くて少し怖かったが、(アイマスクをして走った) 一人でアイマスクをして歩いた時より安心感があった。目が見えない場合は、手を握ったり腕を掴んだり等、他人に支えてもらうだけで安心感が全く変わることがよくわかった。

##### ●一番印象に残ったことは何ですか

- ・(前略) 両チームのチーム内でのコミュニケーションや試合進行を支えるスタッフの動きが今回のイベントでよく観察できたので印象に残った。
- ・やはり選手だったり、この人たちを支える人々の思いが印象に残った。本気で戦って、本気で喜んで、本気で悔しがるチームの人たちの姿はとても印象に残ったし、自分もそのような感じられることを見つけたいと思った。
- ・1番印象に残ったのは試合だが、その前の選手との交流イベントもとても楽しかった。ふだんは、目が見えない人と話すこともないが今回交流してとても楽しめた。(中略) 選手同士でも声をかけあっていて心をひとつにしなきゃいけないと改めて感じた。

アンケートの内容から、本実践の目的である参加生徒のブラインドサッカーへの興味関心を高めることや視覚障がいの理解を深めることについては達成できたことが伺える。今後もこのような活動を継続していくことで、より多くの生徒に障がいや支援の方法について学べる機会を与えることになり、ひいては次代を担う子どもたちにとって共生社会の実現に向けて考えるきっかけをつくることのできるのではないだろうか。



日本代表・free bird・附属中で撮影(下段左から4～9番目が附属中の生徒)

- 
- i 本実践では東京パラリンピック実施種目である B1 クラスのみを取り扱った。
  - ii 筑波大学オリンピック教育プラットフォームによるアンケート結果を参照した。

## 附属聴覚特別支援学校

筑波大学附属聴覚特別支援学校 岡本 三郎

### 1. はじめに

本校でのオリンピック・パラリンピック教育は幼稚部から専攻科の各部各科において幼児児童生徒の実態に即して行われている。今年度はオリンピック・パラリンピック関係の本を購入し各部各科の図書室に配架した。幼稚部では「世界の国旗」や「世界のあいさつ」等の本、小学部から高等部ではオリンピックやパラリンピックについての具体的な内容の本、専攻科（歯科技工科）ではスポーツで使うマウスピースに関連する本など、幼児児童生徒の発達段階や興味関心に即した本を中心に購入し、休み時間に多くの子供達が自由に閲覧している姿を見ることができた。また、教員が授業や文化祭展示の参考資料として活用することができた。



小学部 図書室

小学部では体育祭の演技と関連づけて2020応援ソング「パブリカ」ダンスを披露。「めざせ 東京オリンピック」という種目も創作した。また、今年度は小学部高学年を対象に「車いすバスケットボール」の特別授業を行った。中学部では講師を招聘し「ラート運動」に取り組んだ。高等部、専攻科は体育の授業で「ラート運動」を扱った。

### 2. 車いすバスケットボール

12月6日（金）、「令和元年度オリンピック教育活動」の一環として、本校小学部高学年36名を対象に、車いすバスケットボール講演・体験会を行った。

昨年度に引き続き、東京都車いすバスケットボールチーム「NO EXCUSE」所属・橘貴啓選手にお越しいただいた。講演会では橘選手ご自身の経験談や、車いすバスケットボールのルールについてクイズ形式での説明があり、児童たちも熱心に聞き入り、車いすバスケットボールについて大きな関心を寄せていた。

車いすバスケットボール体験では、はじめに橘選手による競技の説明と実演が行われた。車いすを巧みに走らせながらシュートを決める見事なテクニックに、児童たちから驚きと歓声の聲が上がった。

その後児童たちも実際に車いすバスケットボール用の車いすに乗り、操作の仕方を一通り学んだ後、実際に試合を行った（ボールはバレーボールを使用）。車いすやボールの扱いに戸惑いながらも、しだいに慣れてくると車いすを走らせシュートを放つことができるようになった。そのたびに、大きな歓声を上げ、車いすバスケットボールの楽しさを味わうことができた。パラリンピック競技を知る大変貴重な充実した体験会となった。以下に、車いすバスケット体験をした後の児童の感想を一部紹介したい。



車椅子バスケットボールの試合を体験

- ・楽しかったのは試合をしたことです。難しかったのは、車いすを自力でこぐこと。車いすバスケット選手はいつもこいでいると思うと、とてもすごくて応援したくなりました。（小5女子）
- ・バスケの試合の時やあわててしまった時、左右に曲がるのが難しかったです。ちばな先生はハンドリムを回さずに体を使って車いすを左右に動かすなんてすごい！と思いました。（小5男子）
- ・素早くボールのところに行くのが難しかった。でも、みんなで協力して、パスをし合ったことが楽しかった。バスケット

の車いすには普通の車いすにはない、小さなタイヤが後ろについていた。背もたれが低かった。車いす卓球や車いすテニスもやってみたいです。(小6女子)

- ・普通の車いすと違って、進むことや曲がるのがやりやすく、とてもびっくりしました。車いすをこげばこぐほど気持ちが悪く、「もっとやりたい!」と思いました。難しかったのは、ボールをひざの上において前に進むこと。あごを使ってやりましたが、そうすると前が見えなくなり大変でした。バスケット用の車いすは、タイヤがハの字になっているので、その場で小さく回ることができるのですこいなと思いました。(小6男子)

### 3. ラート運動 (本校のラート運動の取り組みは5年目となる)

ラート運動は、ドイツのオットー・ファイクが子供の遊び道具として考案したものであり、筋力でラートを制御するというよりも、身体の平衡機能や位置感覚、重力などを利用してラートを回転させ、空中回転や宇宙遊泳のような非日常的な感覚を体験することができる。そのため、体育の授業でマット運動等の苦手な生徒でも初めて体験する動きに対して楽しさやおもしろさを感じ、達成感や満足感を得ることができるので、積極的に取り組むようになるのがラート運動の魅力である。

令和2年1月31日(金)、筑波技術大学の天野和彦准教授を講師に招き、中学部生を対象に「ラート運動」に取り組んだ。両足をラートに固定するベルト(ピンディング)は、通常のベルトではなくかかとつきの補助ベルトを使用。生徒へ安心感を与えると共に安全に配慮した。

中学部1年生は初めての活動である。授業の冒頭、初めて見るラートの大きさに圧倒される様子があった。天野先生の模範演技を見て歓声が上がったが、自分たちが2時間で取り組む内容であることを知り、期待と不安が入り交じった表情を浮かべる生徒が多くいた。その後、適切な指導の下で練習し全員が側転、後転、前転ができるようになる。中学部2、3年生はラート運動の経験は2回目、3回目になる。年に一度の体験だがとても意欲的であり希望者は新しい技に挑戦することができた。身長順に3~4人でグループを作りラート運動に取り組むが、各グループで1人が練習中に他の生徒がラートの両側面に立ち肘を伸ばすタイミングを確認しあい、目で見える位置や顎の角度等を指摘するなど自然発生的にアドバイスを出し学び合う姿が見られた。一人一人の「できる」動きが増える体験を通して運動のおもしろさを経験し、それが自信に繋がり互いに教え合う力を引き出す活動になっていると考えられる。

授業後の講師への生徒のお礼の言葉の中で、「また来年教えて下さい。」「来年の授業を楽しみにしています。」「次の技を考えておいてください。期待しています。」等の言葉を多く聞くことができた。今後もこの活動を継続できればと考えている。



天野先生の実演



アドバイスしながら練習する様子

## 附属大塚特別支援学校

筑波大学附属大塚特別支援学校 紅林 仁

### 1. 『大塚オリパラデー』

本校では2016年度より、オリンピック・パラリンピック教育を学校の重点プロジェクトとして位置づけ、幼稚部から高等部までの全校を挙げて取り組んでいる。大塚のオリンピック・パラリンピック教育の目標は①生涯スポーツを通じたスポーツ活動、②多様な価値観、③他者への敬意、の3つを柱に据えている。これらを実現するために、今年度は以下のような実践を行った。

第1回は、前半にオリンピック・パラリンピックについての学習、後半はボッチャの体験活動を行った。オリンピック・パラリンピックの学習では競技の様子を写真で紹介したり、2020年は東京が舞台となって大会が開催されたりすることを日付やどこの会場で行われるのかも含めた紹介をした。ボッチャの体験活動では、各部対抗でボッチャのゲームを行い児童生徒の実態に応じた環境設定、教具の工夫をすることで全校が一丸となって盛り上がる事ができた（写真-1）。小学部の児童が傾斜台を使ってボールを転がす様子を中学部の生徒が応援したり、高等部の生徒がボールを転がす様子を幼稚部の幼児が目を輝かせながら見つめたりする様子が印象的であった。活動を通して自己や他者への気付き、お互いの価値を認め合う姿に大きな成長を感じた。



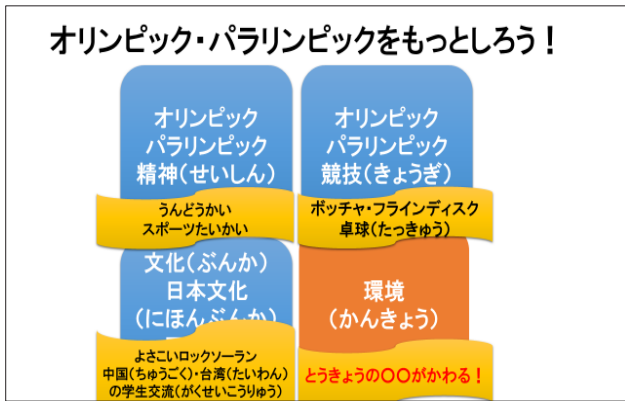
写真-1 ボッチャ



写真-2 ソーラン節

第2回は、国際オリンピック委員会（IOC）が定める6月23日のオリンピックデーと関連して、大塚オリパラデーを開催した。2020年に東京でオリンピック・パラリンピックが開催されるため、日本の文化や歴史的な背景を学ぶ機会として、ソーラン節とドジョウすくい体験を行った。ソーラン節は、ロック調の曲を使用して、リズムカルに踊れるようにした（写真-2）。ドジョウすくいは、ドジョウの絵とザルを紐で結び、すくって捕らえるようにした。児童生徒の感想から「ドジョウがすくえて嬉しかった」、「もう一度やってみたい」等が挙げられた。

第3回は、東京都オリンピック・パラリンピック教育の4つのテーマ「精神」「競技」「文化」「環境」への理解推進から「環境」について取り挙げた（図-1）。開催地である東京がどのようにしてオリンピック・パラリンピックを支えていくのかについて、児童・生徒にとって身近で興味・関心の高い東京の駅や鉄道を題材にした「オリパラとうきょうてつどうクイズ!!!」で理解を促すこととした（図-2）。都内では、世界中から押し寄せる観光客の輸送手段となる公共交通機関の整備が急速に進められており、多様なニーズを持つ人々が安全に、安心して、快適に過ごすためのバリアフリー化やユニバーサルデザインの導入事例について写真スライドを使いクイズ形式で学習活動を行った。クイズでは、都内各路線に導入された新型車両11事例を紹介し、車いすのためのリフトおよびフリースペース、ホームドア、情報提供のためのフリー Wi-Fi、事故や災害時に備えて携帯電話の充電ができるコンセント、8か国に対応したタッチパネル式の券売機、ホームと電車の間の段差の解消例などの写真スライドを用いて質問と解説を行った。児童・生徒は、日常的に利用している駅や鉄道について自分たちの体験や知識をもとに積極的に挙手し発言する姿がみられた。



(図-1 スライド①)



(図-2 スライド②)

第4回は、楽しみながらスポーツに取り組むことをねらい、運動の様々な要素（投げる、打つ、転がすなど）を取り入れた5種目のアダプテッドスポーツ体験を行った。高等部3年の生徒が見本を見せるなど、一部生徒による運営も行った。子どもの実態によって、フライングディスクをカラーボールに代えて取り組むなど、幼児児童生徒いずれも取り組みやすいもので行うことができ、楽しむ姿が見られた。(写真-3)



写真-3 スナッグゴルフ



## 附属桐が丘特別支援学校

筑波大学附属桐が丘特別支援学校 寒河江 核

当校のオリンピック教育は、各教科、道徳や総合的な学習の時間、特別活動において、在籍する児童生徒の実態に応じて行われている。今年度の主な取り組みを紹介する。

### 1. 台湾交流～国立南投特殊教育学校・台中市立啓明学校～

平成28年度より交流締結している台湾の国立南投特殊教育学校と、近隣の台中市立啓明学校の児童生徒が6月17日に本校を初訪問した。11歳から19歳11名と保護者、教員、通訳、計24名の団を本校高等部生徒が出迎えた。

英語の合同授業、昼食や歓迎セレモニーに加え、本校高等部1年生とチームを組みポッチャで交流を行った。台湾からは自閉症や視覚障がいのある児童生徒が来校し、障がいの垣根を越え、身振り手振りを交え言葉を交わしながらポッチャを通して交流を深めることができた。



### 2. 運動会での取り組み（本校中学部・高等部によるダンス）

9月末に行われた運動会で、本校中学部・高等部（それぞれ2・3年生）の生徒が体育の授業で取り組んだ創作ダンスを発表した。ダンスのテーマは「2020年 東京から世界へ」。授業のはじめに、「東京といえば?」、「日本といえば?」というテーマで、個人が思うことを出し合い、自分たちが住む日本の文化や東京の名所、多くの外国人の方も暮らしていることなどについて共有した。共有したことをもとに3つのグループに分かれ、それぞれの表現方法を互いに認め合い、表現の方法を工夫しながらテーマに迫った。



「日本」、「東京」のイメージについての発表



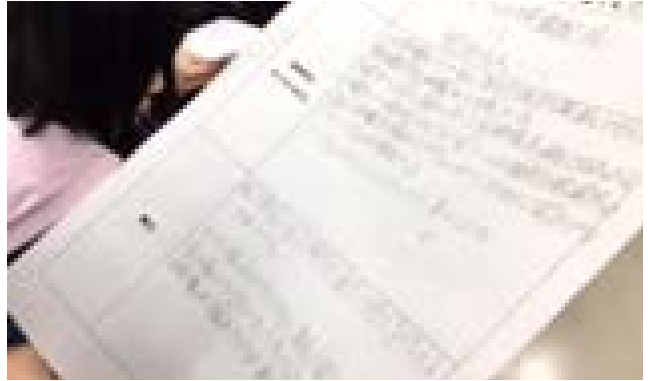
サビは会場を巻き込む分かりやすい振り付け



フィナーレは「スリー・アギトス」をイメージした振り付け

### 3. スポーツとのかかわりについて考える（～する・みる・ささえる・しる～の視点から）

スポーツの1シーンの写真を手がかりに「このシーンに『かかわっている人』」について、意見を出し合い、関連するキーワード毎にグループ分けをし、スポーツにかかわる人の理解を深めた。その後の活動として、「スポーツをする・みる・ささえる・しる」をテーマに、「種目」や「注目選手」（する）、「監督・コーチ」や「メディア」（ささえる）等について、個人で興味をもった事について調べ学習を行い、発表を行った。



#### 4. 講演会：パラリンピアンから学ぶ 講師 副島 正純氏

講演は2部制で行い、1部「オリンピック・パラリンピックについて」では、歴史やオリンピズムについてご講演いただいた。2部「障がい受容からスポーツへ」では、自身から障がいを負った当時の心境や競技者として取り組む中で、家族や周囲の人との関わりが変化したこと、陸上競技の魅力、今後の目標等についてお話を頂いた。生徒の感想では、「仕事と競技を両立する大変さ、自分自身との向き合い方を学んだ」、「現在受験生で、結果ばかり気にしているが、合格するための努力の大事さについて改めて気づいた」、「好きなことを続けることで周りが変わったという話を聞いて、得意なことでも人のためになることをしていきたい」、「障がいをもっているということに悪い印象をもつのではなく、それを糧にたくさんの人の支援や協力の中で学業と両立しながら頑張りたい」等の感想が挙がっており、生徒の心に強く響いたことがうかがえた。



## 附属久里浜特別支援学校

筑波大学附属久里浜特別支援学校 塚田 直也

今年度、本校のオリンピック・パラリンピック教育のねらいは、以下の通りである。

- (1) 世界の様々な国名や国旗への興味や関心を高め、オリンピックやパラリンピックの競技を観戦するときに、国旗の付いたユニフォームを着用している選手を見たり、応援したりする気持ちを高めるとともに、自分の国や国旗を大切にしたいという気持ちを育む。
- (2) オリンピックやパラリンピックに関連する競技を知ったり、経験したりすることを通して、オリンピックやパラリンピックへの興味や関心を高めるとともに、スポーツをすることの楽しさを感じる。

ここでは、今年度の運動会での特徴的な取組と小学部5・6年生の子供を対象に実践したポッチャ体験授業について報告する。

### <運動会での特徴的な取組>

本校の運動会は、毎年、10月に実施している。幼稚部の幼児と小学部の児童と一緒に、日々の運動遊びや体育の授業で学んできたことを、保護者やきょうだい児、祖父母、地域の方々など、多くの人前で発揮できるように、指導を行っている。

今年度は、万国旗を一新し、世界の国々の国旗を会場全体に張り巡らせ、子供たちが様々な国旗に興味をもつことができるようにした。

幼稚部では、運動会に向けた活動の中で、「はじめてのこっきえほん」（ジャパンクリエイティブズ著、てづかあけみイラスト、ハイパーインターナショナル）を子供と一緒に読むことに取り組んだ。ある子供は、絵本に出てくる国旗を一つずつ指さし、教師に視線を向けて「これなあに？」という思いを伝えた。教師が「日本の旗だね。」や「アメリカの旗だね。ここ赤色だね。」などと語り掛けると、再度、イラストの国旗を見つめ、指先で触っていた。その子供は、運動会当日、自分よりはるかに高い位置に張り巡らせている万国旗の中に、絵本で見た国旗を見付け、ほほ笑みながらその旗を指さし、教師に「あの旗、知っている！」という思いを表現した。運動会に万国旗を飾ることは、当たり前のようにあるが、特に、低年齢段階の子供たちにとっても様々な国旗に興味をもつきっかけとなることが分かった。

また、本校の運動会は、全校の子供が、青、赤、白の3組に分かれ、「玉入れ」や「かけっこ」の結果を基に、互いの点数を競い合っている。それぞれの順位に応じて、メダル授与を行うことができるようにするためである。1位は金メダル、2位は銀メダル、3位は銅メダルをもらうことができる。

今年は、点数や勝敗が子供たちに分かりやすいように、花を得点板に付け、子供たちの目の前で結果発表をした。得点板を見て、結果を理解した子供は、「やったー！」と歓声を上げたり、「あー。」と悔しそうな声を出したりしていた。得点を競い合うことを通して、子供たちは、チームへの所属意識を高めたり、勝負することの面白さを感じたりすることができた。オリンピックやパラリンピックには、様々な競技がある。各国の選手が所属感をもちながら、競い合う様子を観戦する楽しさへとつながっていくと考える。

閉会式では、メダルの価値を感じ、金メダルをもらった子供は、うれしそうにポーズをしていた。また、他の組の子供が、その様子をうらやましそうに見ているのも印象的だった。



万国旗の下でくりはま体操



得点発表!! 勝ったのは?



今年は赤組が優勝

＜ボッチャ体験授業＞

小学部5・6年生の11名の子供たちを対象に、パラリンピック種目であるボッチャを体験する授業を行った。ボッチャは、幅広い年齢の子供が楽しむことができる競技であり、本校の子供たちに適していると考え、全6回の計画で、授業を進めていくこととした。



リオパラリンピックの開会式の映像を観ました

1、2回目の授業では、東京2020オリンピックやパラリンピックについて学習した。子供たちに、いつ、どこで、どのような競技が行われるのかを、映像や写真を用いて伝えた。子供たちは、オリンピック・パラリンピックの競技に興味を示し、特に、陸上や水泳といった自分たちが経験している競技を映像で見ると、食い入るように見たり、走るまねなどをしたりしていた。

3回目の授業から、ボッチャを取り扱った。教師がボッチャで使用するボールを差し出すと、子供たちは、身を乗り出して近付き、ボールを手に持ち、さすったり、上に投げたり、床に投げ付けたりしていた。ボッチャのボールの触り心地や重さなどに興味をもったようだった。

4回目のボッチャ体験学習には、パラリンピック日本代表の強化指導部長である村上光輝氏を招き、ボッチャの面白さを実感できるような活動を行っていただいた。色画用紙の上にボールを乗せるという簡単なルールのある活動に取り組んだ。子供たちは、目の前の色画用紙に、ボールを落としたり、転がしたり、投げたりして懸命に乗せようとしていた。しかし、ボールを強く転がしすぎてしまい、色画用紙の上にとどまらずに、転がってしまう。すると、次は、もっとゆっくりと投げたり、転がしたりするなど、力加減を調整するようになった。どの子供たちも、いきいきとした表情で、意欲的にボールを投げたり、転がしたりしていた。また、当日は、保護者も見学しており、体験授業後、「ボッチャの楽しさを知りました。パラリンピックに子供を連れて行きたい。」といった発言も聞かれた。

授業後、村上氏と授業研究会を行った。村上氏からは、ボッチャの楽しさは、「ボールを集めること」と「ボールを弾くこと」であると教えていただいた。ボッチャのルールに子供を合わせるのではなく、子供たちの実態に合わせてボッチャの楽しさを教えることの大切さを学んだ。

次年度も、子供たちがスポーツすることの楽しさを感じるとともに、日本で実施されるオリンピック・パラリンピックに興味・関心をもつことができるような活動を行っていきたい。



色画用紙に向かってボッチャのボールを投げたり、転がしたりしました



ボッチャ日本代表、金メダルを目指して頑張れ！！



村上氏を交えた授業研究会

10年を振り返って

一般財団法人嘉納治五郎記念国際スポーツ研究・交流センター 大橋 民恵

嘉納治五郎記念国際スポーツ研究・交流センターは嘉納治五郎先生がアジア初のIOC委員に就任してちょうど100年目となった2009年5月27日に日本のスポーツ100周年記念事業の一環として、また、2016年の東京オリンピック・パラリンピック招致活動のレガシーとして設立され、昨年10周年を迎えました。

このたび、当初掲げた目標が概ね達成されたということから、成果物等をそれぞれ適切な組織に引き継ぎつつ、2020年末をもって当センターの活動に一旦区切りをつけることとなりました。この場をお借りして、10年間の当センターの活動を振り返り、ご理解・ご協力をいただいた皆様への感謝とさせていただきます。

■オリンピック研究とオリンピック教育

そもそも当センターと筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）の関わりはCOREの設立時に遡ります。2016年の招致活動を経て、日本には国内のオリンピック・ムーブメントをけん引するオリンピック研究センターが必要であるということが明らかになりました。日本初のIOC公認オリンピック研究センターを筑波大学に作るために当センターが窓口となり、2010年にIOCの承認を得ることができ受けることとなり、その後もCOREの運営委員会アドバイザーとして微力ながらサポートをさせていただきました。

2013年には文部科学省、日本スポーツ振興センター、筑波大学と共催で英国ラフバラ大学のイアン・ヘンリー教授を招聘し、「オリンピックの進化と深化」シンポジウムを開催しました。このシンポジウムの内容は、その後の2020年の招致プレゼンテーションに大きく貢献したと伺っております。

2014年には現在COREが実施する「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」の礎となった「オリンピック・パラリンピック教育授業づくりワークショップ」を文部科学省、東京都の協力を得て開催いたしました。

このほか、当センターでは、第1回のシンガポール大会からユースオリンピック（YOG）の文化教育プログラム（2020年のローザンヌYOGではAEP：Athlete365 Education Programmeとして実施）の調査研究を継続して実施してまいりました。YOGは、スポーツと文化・教育の融合というオリンピック・ムーブメントの原則を体現するものでもあります。

2020年東京オリンピック・パラリンピックを契機にスポーツの価値を多くの方々へ伝える機会が増えておりますが、特に学校教育におけるオリンピック・パラリンピック教育についてはCOREが果たす役割は非常に大きいと思われまします。ますますの発展を祈念していただいております。

■スポーツの価値を守る活動

そもそもスポーツの価値自体が揺らいでいるのは、オリンピック・ムーブメントを推進することができません。しかし現代のスポーツはドーピングや八百長、それらに基づく賭け等、様々な危機にさらされています。

当センターは2009年に「青少年とスポーツ」、「青少年とアンチ・ドーピング活動」をテーマに、WADA関係者、国内スポーツ関係者等を対象に国際セミナーを開催し、これからの青少年のスポーツ教育の在り方について参加者相互の理解と連携を深めました。

同時期より公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構（JADA）との連携事

**参加無料 同時通訳あり**

国連大学 ウ・タント国際会議場  
※新幹線歩10分、表参道駅B2出口徒歩5分  
2013年7月13日(土)  
13:30~16:30(受付13:00~)

2020年オリンピック・パラリンピック競技大会の開催地決定が9月に迫り東京が選ばれたか否かに世間の注目が集まっています。2020年に向けて、東京は進化を遂げるオリンピック・ムーブメントの発展のために貢献することができるといえるでしょうか。世界の、そして将来の世代に向けたメッセージを発信します。

**International Symposium for the Olympic Movement in Japan: オリンピズムの進化と深化**  
Universal value of Olympism and development through sport

13:40 高橋講演：イアン・ヘンリー（英国ラフバラ大学教授/オリンピックスタディーズ研究センター長）  
14:15 トークセッション「オリンピックとオリンピック・ムーブメント」  
田田 雄貴（フェニックスメダリスト）、田田 陽子（米道メダリスト/日本大学准教授）  
15:15 パネルディスカッション「オリンピックの進化と深化」  
コーディネーター：野野 一樹（独立行政法人日本スポーツ振興センター理事）  
パネリスト：イアン・ヘンリー 真田 久（筑波大学教授/オリンピック教育プラットフォーム事務局長）  
松澤 学（パネリストコーディネーター）

**参加申込** 参加される方のお名前、ご所属、ご連絡メールアドレス/電話番号を記載の上、7/10(木)までに20130713@100yearlegacy.orgまでお申し込みください(定員300名)。

文部科学省 JAPAN SPORT COUNCIL 40th Anniversary 筑波大学開学40+101周年記念事業

※最新の情報については、速報日本スポーツ振興センター web サイトでお知らせいたします。

国際シンポジウム「オリンピックの進化と深化」は2020年のオリパラ開催地決定の直前であったこともあり、多くの方にご来場をいただけました。

公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構公開セミナー  
筑波大学開学40+101周年記念事業

integrity of sport  
**スポーツの完全性の保全とスポーツ政策**

スポーツ政策におけるアンチ・ドーピング戦略を事例として  
講師：バリー・フーリハン（英国ラフバラ大学教授）  
モデレーター：浅川伸（日本アンチ・ドーピング機構事務局長）  
日時：平成25年2月27日(水) 17時30分~19時30分  
場所：筑波大学東京キャンパス134教室  
\*お申し込みは不要です。直接会場にお越しください。

スポーツ政策及びアンチ・ドーピング政策における世界的権威である、英国ラフバラ大学のバリー・フーリハン（Barrie Houlihan）教授を招聘し、日本のスポーツ関係者及びスポーツ政策に関わる実務家・研究者向けのセミナーを下記の通り実施します。国内では、スポーツの透明性・公平性・公正性等、スポーツのガバナンスに注目が集まっていますが、同時に世界のスポーツ界ではスポーツが価値あるものとして存在するために、「スポーツの完全性（integrity of sport）」の保全という概念が注目されています。そして、現在、世界各国でも官民を挙げてこの「スポーツの完全性」を保全するための取り組みが始まろうとしています。その先鋒の一つとして、アンチ・ドーピング活動があります。アンチ・ドーピング活動は、競技や国の枠を超え、世界で官民が協働してスポーツの価値を守り、伝達していくという活動を展開し、世界の規程や標準の下に、各国が共通価値を持って法整備を推進している分野です。今回のセミナーでは、グローバルなスポーツ政策の展開、スポーツ政策におけるガバナンス全般、アンチ・ドーピング戦略の重要性について話題提供いただくとともに、先日公表されたアンチ・ドーピング関連法整備に関する調査研究について議論をいただきます。グローバルなスポーツ政策やスポーツにおける 이슈から、今後の日本のスポーツ政策、ガバナンスの構築とアンチ・ドーピング政策の推進と関連について議論を深めたいと思います。奮ってご参加ください。

主催：公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構  
共催：国立大学法人筑波大学  
一般財団法人嘉納治五郎記念国際スポーツ研究・交流センター  
問い合わせ：info@100yearlegacy.org  
03-5790-9656

参加費無料 同時通訳あり

嘉納治五郎記念国際スポーツ研究・交流センター

「スポーツの完全性の保全とスポーツ政策」セミナーは筑波大学開学40+101周年記念事業として開催されました。

業を通じて、スポーツの価値を広く一般の方々に伝え、守る方法について検討を重ねてまいりました。その後、JADA の教育活動はアジア・オセアニア地域へも展開されるようになっていきます。

また、スポーツの価値を守るためには、スポーツのインテグリティについて考えていく必要があります。2013 年には JADA と筑波大学との共催で「Integrity of Sport」をテーマにセミナーを開催いたしました。

スポーツの価値とスポーツのインテグリティは社会の中でのスポーツを考える上で今後も一層重要なテーマとなっていくと思われまます。

### ■スポーツを通じた国際貢献

2016 年の招致活動を展開する中で、オリンピック・パラリンピックを日本で開催することでどんな国際貢献ができるのかという課題に明確な答えを出せませんでした。当センターでは、発足当初よりスポーツを通じた国際貢献のあり方について情報収集を進めてまいりました。2009 年から 2 年間に渡り、特定非営利活動法人ハート・オブ・ゴールドの御協力で「スポーツを通じた国際開発」に関する調査研究を実施してまいりました。世界ではスポーツ人材派遣やスポーツ用品の寄付という従来型の国際貢献だけにとどまらない、新しい社会課題に対するスポーツのあり方が少しずつ始まっております。

2013 年には日本国政府による Sport For Tomorrow が世界に向けて発信されました。当センターではこうした新しいスポーツのあり方を普及すべく、国連サミットで SDGs が採択された直後の 2015 年 10 月にはケニアとタイの NGO から講師を招聘した国際セミナー「開発と平和のためのスポーツセミナー」(2015 年度スポーツ振興くじ助成事業)を、2017 年には国内の社会課題にどのようにスポーツを活用していくかを考えていただくために「プラススポーツのためのワークショップ」(2016 年度スポーツ振興くじ助成事業)を開催いたしました。

スポーツを通じた国際貢献は、この 10 年でその概念を広げ、国内においても SDGs 等の社会課題解決のためのスポーツ、スポーツを通じた社会課題解決というあり方へと大きく変化しております。



「プラススポーツのためのワークショップ」では、日本に古くから伝わる「ことごとろ」をアイスブレイクに使いました。

### ■スポーツを通じた人材育成

当センターでは、嘉納治五郎先生が明治以降、現在の中国から最初に多くの留学生を受け入れ、延べ人数で 8000 人以上となったという史実を元に、日本だからこそできるスポーツを通じた人材育成プログラムの開発に取り組みました。

2012 年から毎年夏にアジアの十数都市からジュニア世代のアスリート 200 人が来日して参加するジュニアスポーツアジア交流大会の中の選手交流プログラムの企画運営を行っております(東京都スポーツ文化事業団連携事業)。2016 年からは障がい者アスリートも参加するようになりました。ノンバーバルな身体活動を通じた交流プログラムは、よきこいや鬼ごっこ等、日本の文化を取り入れ、ユニークなものとなっております。

2014 年には国連開発と平和のためのスポーツ事務局 (UNOSDP) による「ユースリーダーシップキャンプ」を文部科学省の委託事業として日本に誘致することに成功いたしました。UNOSDP とプログラム内容を調整しつつ、ラジオ体操や学校の運動部活動の紹介、東日本大震災の被災地視察等日本独自の特別プログラムを組み入れました。2 年目と 3 年目は Sport For Tomorrow プログラムの一環として、全日程を東日本大震災被災地である宮城県岩沼市で開催いたし



東日本大震災の被災地を訪問するユースリーダーシップキャンプ参加者たち。



ブラインドサッカー体験を通じて、コミュニケーションの重要性を学ぶ参加者。

ました。復興に向けてスポーツが果たせる役割を提案してもらうなど、実際の課題に対し、スポーツがどのような役割を果たせるかということテーマとしたプログラム作りを進めました。これは日本が「支援する側」で、参加者の多くを占める途上国出身者が「支援される側」ではなく、お互いに理解し、学び合うことこそが嘉納先生の「自他共栄」の精神を体現することなのだという理解によるものです。そして4年目となった2017年3月には、実際にスポーツを用いて社会課題の解決に取り組んでおられる世界各地の人材を対象としたプロジェクトマネジメント研修と、その成果発表の場として国際シンポジウム(International Symposium on Sport for Development and Peace with Sport for Tomorrow)を都内で開催いたしました。

これらの事業を通じ、この10年で2,000人近くの若者たちに対してスポーツを通じた人材育成プログラムを提供したことになります。

### ■嘉納治五郎の理念・哲学の普及

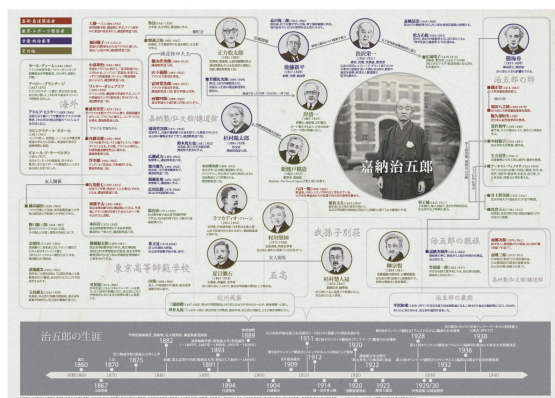
上記のようなスポーツに関する事業に加え、当センターではお名前をお借りしている嘉納治五郎先生の理念・哲学を普及させるための情報提供事業を展開いたしました。2011年には嘉納先生が各地に残した書を中心に筑波大学の真田久先生と共に「嘉納治五郎のレガシー教育×スポーツ×国際貢献」を作成いたしました(2011年度スポーツ振興くじ助成事業)。

2018年には公益財団法人講道館の御協力のもとで嘉納治五郎の人間関係を紹介した「嘉納治五郎人脈マップ」をリリースし、大学の授業などで使用していただく等、高い評価をいただきました(2017年度スポーツ振興くじ助成事業)。2019年には我孫子市の協力を得て、「嘉納治五郎から学ぶ連続講座」を企画運営いたしました。「嘉納治五郎から『精神』を学ぶ」(講師:村田直樹先生/講道館)、「嘉納治五郎から『ジェンダー』を学ぶ」(講師:山口香先生/筑波大学)、「嘉納治五郎から『教育』を学ぶ」(和田孫博先生/灘校)、「嘉納治五郎から『平和』を学ぶ」(永木耕介先生/法政大学)を4週連続で開催いたしました(2018年度スポーツ振興くじ助成事業)。ちょうどNHKの大河ドラマで「いだてん」がスタートしたこともあり、200名を超える申し込みをいただき、会場も満員となりました。

2019年度は講道館と共同でスマホアプリと紙媒体による嘉納治五郎マップの製作に取り組みました。オリパラ開催時に海外の方に嘉納治五郎ゆかりの地に関心を持ち、訪問いただきたいと思い、日本語以外に英語、フランス語、スペイン語の4か国で提供しております(2019年度スポーツ振興くじ助成事業)。

これらの制作物は著作権も含めて講道館に寄贈させていただく予定です。引き続き、嘉納先生の思想や精神を可能な限り多くの方々にお伝えしていく一助となっていければと願っております。

以上のように、当センターでは、嘉納治五郎先生の理念を基に、社会の中におけるスポーツの価値を広めるための様々な活動を展開してまいりました。この10年の間に日本のスポーツ界では、2011年のスポーツ基本法の制定とスポーツ宣言日本、2013年のオリパラ招致成功、2015年のスポーツ庁の発足等、大きな動きがありました。そして現在、新型コロナウイルスによる感染症が蔓延し、世界中の人々が予期せぬ苦難を強いられています。2020年オリパラ東京大会が延期になるなど、スポーツ界も大きな影響を受けています。新型コロナ禍の収束とオリパラ東京大会の無事の開催を祈念しつつ、この機会に多くの方が社会の中におけるスポーツのあり方についての議論を深め、この経験が新しいオリンピック・ムーブメントを生みだすことを期待したいと思います。



各方面から高い評価をいただいた「嘉納治五郎人脈マップ」。作成にあたっては、真田先生、大林先生のご協力をいただきました。



「嘉納治五郎から学ぶ連続講座」を開催した我孫子市は嘉納先生の別荘地があったことで知られています。2020年4月には嘉納先生の銅像も建立されました。



「嘉納治五郎マップ」では現在地から嘉納先生ゆかりの地を検索して訪問することができます。

## 世界に向けたおもてなしの発信

筑波大学客員教授 江上 いずみ

### 1. 日本国内におけるオリンピック・パラリンピック教育

2013年9月にオリンピック・パラリンピックの招致が決まり、2014年度から開催都市である東京都を中心にオリンピック・パラリンピック教育が始まった。オリンピック・パラリンピック教育を通じて、子どもたちがスポーツの価値やオリンピック・パラリンピックの意義に触れることは、東京2020大会に向けた全国的な機運の醸成のみならず、それ以降の東京大会の有形・無形のレガシー創出に向けてきわめて重要な取組だといえる。

開催都市東京では、2014年度に都内の300校を「オリンピック教育推進校」に指定した。2015年度には「オリンピック・パラリンピック教育推進校」と名前を変え、600校を推進校に指定した。その趣旨は「2020年東京大会開催を踏まえ、幼児・児童・生徒が、

- ・スポーツにより心身の調和的な発達を遂げ
- ・オリンピック・パラリンピックの歴史・意義や国際親善などその果たす役割を正しく理解し
- ・我が国と世界の国々の歴史・文化・習慣などを学び交流すること
- ・またそれらを通して国際理解を深め、進んで平和な社会の実現に貢献すること

と記されている。

このような教育の必要性は指定校に留めることなく、東京都全体で実施することが重要であるという認識から、翌2016年度からは都内2300校全校がオリンピック・パラリンピック教育推進校に指定され、年間35時間のオリンピック・パラリンピック教育が実施されてきた。

さらに、オリンピック・パラリンピック教育は、開催都市のみならず、東京2020大会を成功させることを目的に、スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」として全国で展開されている。

2019年度においては、34道府県、11政令都市を含めた全国の45地域を、筑波大学、日本体育大学、早稲田大学が連携して、推進校におけるオリンピック・パラリンピック教育の実践を支援している。

こういった日本国内におけるオリンピック・パラリンピック教育においては、ホスト国の国民として、どのように外国の方々をお迎えし、「おもてなし」を施していくかを学ぶことも重要なものの一つと言える。

### 2. 外国人に向けた日本文化の伝達

来日した外国人が、日本でいかに心地良く過ごすことができるかは、ホストの努力はもちろん大切だが、事前に諸外国の方々に、日本の文化や習慣、しきたりを知っていただくことも大切である。

そのような視点から、東京2020大会の招致決定以降、これまで以下のような国から依頼を受けて「Japanese Culture and OMOTENASHI」というテーマの講演を手掛けてきた。

2015年2月 カタール・ドーハ：オリンピック委員会およびアスパイアアカデミー

2015年3月 フランス・パリ：国立社会科学高等学院

スイス・ローザンヌ：スポーツマネジメント大学院（AISTS）

2015年6月 アゼルバイジャン・バクー：第1回ヨーロッパ競技大会組織委員会

2016年3月 タジキスタン・ドゥシャンベ：国立体育研究所

2016年8月 ブラジル・サンパウロ：サンパウロ大学

2017年2月 インド・デリー：マナブラチャナ国際大学

2017年4月 チュニジア・チュニス：大使館・外交官養成機関

2017年11月 イタリア・ミラノ：イタリアスポーツ教育協会

2018年3月 韓国・ピョンチャン：ヨンイン大学

2020年2月 インド・ニューデリーおよびパティアラ：インドスポーツ省



1. 2016年3月タジキスタン講演の様子



海外における講演時は、必ず和服を着て登壇することになっている。日本の着物を見るだけで、聴講する人々は嬉しそうに眺め、日本の文化を深く感じてくださる。

おもてなし文化を紹介する諸外国におけるこういった講演は、2020年が近づくとつれ、日本人の思いやりや心づかいといった精神性に対する関心が高まってきたことが感じられた。

大会に出場するアスリートにとって、日本の風土や習慣を知った上で競技に参加することは、さらに競技者としてのパフォーマンスを向上させることに繋がると考えられるようになってきた。

そのような視点から、このほど、インドのトップアスリートを対象に日本のおもてなし文化や精神性を理解するためのワークショップを開催したいと、インドスポーツ省より招請を受け、渡印した。

### 3. インド講演の実際

インド・オリンピック委員会 (IOA) の協力のもと、インドスポーツ省 (SAI) によって開催されたインド講演は、東京 2020 大会に参加予定のインドのオリンピック・パラリンピックを目指すアスリート、コーチ陣およびスポーツ省の方々が対象で、「ROAD TO TOKYO 2020: Japanese cultural sensitivity workshop OMOTENASHI」と名付けられた。

インドの方々は礼儀をととても大切にしている。そのような気質から、彼らが最初に学びたいと希望したのは、日本人に対する「挨拶の仕方」であった。

インドでの挨拶は「ナマステ〜」と言いながら手を合わせ、相手の目をしっかり見てお辞儀をする。それに対し、日本のお辞儀は、武士が主君の前で土下座をするように、急所である頭頂部を見せることで、相手に対する服従や敵意がないことを示すものなので、しっかりと頭を下げ、目を伏せてお辞儀をすることがマナーであることを伝えた。

そして英語やヒンズー語にはその直訳する言葉がない「よろしくお願いたします」というフレーズを教えたところ、聴講するアスリートたちが口を揃えて「Yoroshiku Onegaishimasu」と言ってからお辞儀をする「分離礼 (先言後礼)」で挨拶をした。

また1日のうちの時刻によって「おはようございます」「こんにちは」「こんばんは」と言葉が変わることや「さようなら」「おやすみなさい」「いただきます」「ごちそうさまでした」と様々なシチュエーションによって挨拶の言葉があること、「ありがとう」「どういたしまして」「ごめんなさい」「どうぞ (= After you.)」などの基本的な声掛けを伝えたところ、一つひとつメモを取りながら丁寧に発声していた。

さらに日本において初対面の人との挨拶時に必ず行われる「名刺交換」は未知の世界なのでそのやり方を知りたいと、名刺の渡し方、受け取り方、同時に交換するときのマナーなどについても体得しようと努力していた。

選手陣のほとんどは初めて日本を訪れる人なので、Suicaなどの交通系 IC カードの購入方法や使い方、電車の乗り方やマナー、日本に来たら一度は訪れるであろう温泉でのマナーや日本家屋におけるお風呂の入り方について、動画を見ながら楽しく学んでいた。



2. 2020年2月パティアラでの講演①



3. 2020年2月パティアラでの講演②



4. 2月28日発行 The NEW INDIAN EXPRESS

そして何よりも彼らが一番知りたかったことは、和食を食べる際のマナーだ。全員に割り箸を配り、その割り方や持ち方を学んだあと、輪ゴムやビーズをお皿に入れて箸でつまむ練習を、ある人は器用に、ある人は苦笑いしながら一生懸命練習していた。

このインドスポーツ省主催によるワークショップはキラン・リジジュ (Kiran Rijiju) スポーツ担当国務大臣が出席するとあって、新聞・雑誌・テレビ局など多くのメディアが集まった。

そのリジジュ国務大臣は依然より日本の文化や礼儀をととも興味深く思っており、幾度となく日本を訪れたことがあるという。着物の文化を紹介し、彼に長襦袢・着物・羽織といった大島紬のアンサンブルを着付けたところ、とても感激してくださり、以下のようなスピーチをした。

「日本の文化など伝統的価値はととも高く、それを尊敬することは我々の役目です。君たちアスリートたちは自身だけでなく、インドを代表する存在でもあります。トイレやお風呂でのマナーや公共交通機関の使い方といったことを知らないと、トラブル遭遇や君たち自身の困惑につながります。このワークショップは君たちに日本で過ごすための基礎を教えてくださいました。我々インドスポーツ省 (SAI) は、インド・オリンピック委員会 (IOA) と協力して、アスリートをしっかりとサポートしていくつもりです。インドの哲学は日本で形となることでしょう。スポーツ面で活躍し、さらに日本との繋がりを深めていってほしいと思います」(2月28日発行 The NEW INDIAN EXPRESS)

このスピーチと着物を着たりジジュ国務大臣の姿は、新聞やテレビなどでインド全土に伝えられた。

着物はリジジュ国務大臣のみならず、インドのアスリート誰もが興味を持ち、手を通してみたいと願ったことから、日本から持ち込んだ数枚のゆかたをアスリートに着付けたところ、たいへん喜び、各々携帯で写真を撮っていた。

レスリングのラビ・クマール (Ravi Kumar Dahiya) 氏とディーパック・プニア (Deepak Punia) 氏は大臣の言葉に同意し、現地のメディア ABP LIVE に次のようにコメントした。

「今年の夏、東京で過ごすにあたって、日本人をよりよく理解するために、このワークショップはととも役に立つと思います。」

また、射撃のアビシェク・ベルマ (Abhishek Verma) 氏は、「選手たちが東京大会の選手村に入る前にこのワークショップを受けたことにより、よりよい準備ができていると思う。ワークショップに参加したことで、日本における文化的エチケットがととも重要であり、美しいことがわかった。」とコメントした。

終了後に多くのメディアが、新型コロナウイルスの影響で東京オリンピック・パラリンピックはどうなるのか、と真田教授に詰め寄ったところ、リジジュ大臣がそれらの質問を遮るように一歩前に出て、「新型コロナウイルスの問題は人類共通の問題であり、日本のみならず、我々インドも協力して大会が開催されるように努力しなければならない」と答えた。この言葉に、大臣の私たちに對する強い信頼の思いを感じることができた。

参加したアスリートたちは、まだ東京 2020 大会の延期が決まっていないこの時点において「新型コロナウイルスは心配だけど、私たちは日本で活躍できることを信じて一生懸命練習に励みます」と言ってくださり、彼らのためにも何とか東京 2020 大会を実現させたいという思いを強くする講演会となった。



5. 2020年2月ニューデリーでの講演  
(中央がリジジュスポーツ担当国務大臣)



6. 2020年2月ニューデリーでの講演  
(ゆかたを着て喜ぶインド人アスリートたち)



7. インド講演案内のバナーの前で



Home / News

## Omotenashi: Japanese Cultural Sensitivity Workshop For Indian Athletes

Talking about the importance of the cultural workshop, the sports minister said "Japanese culture and etiquette is very elaborate. You (athletes) are representing India as its ambassador. So, this cultural sensitivity activity is very important for you. We along with the IOA and SAI will provide the best support to the athletes. The philosophy of India has taken a full shape in Japan. And we want to transcend our deep spiritual connection to the arena of sports as well."

By : Kuntal Chakraborty | 27 Feb 2020 06:45 PM (IST)



New Delhi: The Indian athletes have now learnt a lesson or two on wearing the technically-complicated-to-wear kimono that has quintessential Japanese culture written all over it. If Sports Minister Kiren Rijju does himself get draped in a kimono and look nothing short of a typical samurai, why will the Tokyo-bound sportspersons bat an eyelid from trying it?

A segment of our Tokyo-bound Olympians and Paralympians attended a cultural sensitivity workshop termed Omotenashi (the Japanese version of Atithi devo Bhava), organised by Sports Authority of India (SAI), in association with the Indian Olympic Association (IOA), on Thursday.

The main aim was to intimate our sportspersons with the intricacies of the Japanese culture – how to travel in a train in Tokyo, wear the kimono, use chopsticks for proper dining, bowing etiquettes and so on.

The workshop was inaugurated by Kiren Rijju, in presence of Indian Olympic Association (IOA) Secretary-General Rajiv Mehta and a Japanese delegation comprising Prof. Hisashi Sanada, Chairman, Tsukuba International Academy for Sports Studies and Mrs Izumi Egami, a lecturer and a former air-hostess.

Some of the athletes that graced the workshop are shooters Manu Bhaker, Sanjeev Rajput, Deepak Kumar, Abhishek Verma, Yashaswini Singh Deswal, wrestlers Bajrang Punia, Deepak Punia, Ravi Kumar Dahiya, Divya Kakran, Para-athletes Sandeep Chaudhary and Yogesh Kathuniya, among others.

Talking about the importance of the cultural workshop, the sports minister said "Japanese culture and etiquette is very elaborate. You (athletes) are representing India as its ambassador. So, this cultural sensitivity activity is very important for you. We along with the IOA and SAI will provide the best support to the athletes. The philosophy of India has taken a full shape in Japan. And we want to transcend our deep spiritual connection to the arena of sports as well."



Wrestlers Ravi Kumar Dahiya and Deepak Punia agreed with the minister's view and added "the workshop will help us a lot when we head to Tokyo later this year and will help us understand the Japanese people much better when we are there."

Shooter Abhishek Verma further added that "with the help of this workshop the athletes would be better prepared when they enter the Tokyo Games village. We now know that they value their cultural etiquettes at a much higher level and it's a beautiful to see that."

Manner's of daily life, from everyday greetings to public dealings and street manners to food culture, everything quintessentially Japanese remained the food for the topic.

Tags : [Indian Olympic Association](#)  
[ioa](#) | [japan](#) | [Kiren Rijju](#) | [Omotenashi](#) | [Paralympians](#)

# 教師用指導案

## 教師用指導案「聖火と聖火リレー」

- 対象： 小学校低学年
- 本時のねらい： 東京 2020 大会の聖火リレーの意味を理解する
- 準備物： OVEP アクティビティシート 12 ページ、色鉛筆（クレヨン）
- 適用可能な学習時間： 総合的な学習の時間、道徳、学級活動、図工 等

時間	学習活動	指導上の留意点	参照資料等
導入 (5分)	1) 本時の見通しを持つ 【発問】これまでにオリンピックの聖火を見たことがありますか？どんなところに置かれているか考えよう。	オリンピックに聖火リレーがあること、本時はそれについて学ぶことを理解させる。聖火について知っていることを発表させる。	「東京 2020 聖火リレー授業用参考資料」
展開 (10分)  (25分)	2) 聖火と聖火リレーについて知る オリンピックの聖火は聖火台に大会の期間中、灯されています。聖火を聖火台まで運ぶため聖火リレーが行われます。東京 2020 オリンピック聖火リレーのコンセプトについて学びましょう。  3) 「クレヨンや色鉛筆を使って、聖火のトーチの握りの部分によく知っている選手をデザインしてみよう」 「クレヨンや色鉛筆を使って、トーチをデザインしてみよう」 又は 3) 2020 年 3 月から東京 2020 オリンピック聖火リレーが行われる。自分の住んでいる所（都道府県や市区町村）を通るとしたら、どこをリレーしたら良いか考えよう。	東京 2020 オリンピック聖火リレーのコンセプト「 <b>Hope Lights Our Way / 希望の道を、つなごう。</b> 」には、どのような願いが込められているか考えさせる。2 人組になって話し合い、クラスで発表する。  トーチの握りの部分のデザインとして有名なアスリーの姿を描く。祭りなど地域の文化を描いても良い。 過去大会のトーチを参考に、オリジナルのトーチを描く。  なぜそのルートを選んだのか、きちんと考えさせる。 1 人で考えた後、2 人組みで意見を交換する。クラスで発表する。	東京 2020 ウェブサイト「東京 2020 オリンピック聖火リレー」  過去の大会のトーチについては「オリンピック・パラリンピック学習読本中学校編」p. 96-97  東京 2020 大会のトーチやリレールートについては東京 2020 ウェブサイト「東京 2020 オリンピック聖火リレー」
まとめ (5分)	オリンピック聖火と聖火リレーがどんなものでどんな意味があるか、振り返る。	東京 2020 オリンピック聖火リレーに関心を持たせる。	

【監修：国立大学法人筑波大学】

教師用指導案「聖火と聖火リレー」

- 対象： 小学校中・高学年
- 本時のねらい： 聖火と東京 2020 聖火リレーの意味を理解する
- 準備物： インターネットに接続できるタブレット又は PC
- 適用可能な学習時間： 総合的な学習の時間、学級活動 等

時間	学習活動	指導上の留意点	参照資料等
導入 (5分)	1) 本時の見通しを持つ 【発問】これまでに聖火を見たことがありますか？どんなところで見ましたか？	オリンピックには聖火があり、聖火リレーが行われること、本時はそれについて学ぶことを理解させる。	「東京 2020 聖火リレー 授業用参考資料」
展開 (10分)	2) オリンピック聖火について知る オリンピックの聖火は聖火台に大会の期間中、灯されています。聖火を聖火台まで運ぶため聖火リレーが行われます。 東京 2020 オリンピック聖火リレーのコンセプトについて学びましょう。	東京 2020 オリンピック聖火リレーのコンセプト「Hope Lights Our Way - 希望の道を、つなごう。-」にどのような願いが込められているか考えさせる。	「オリンピック価値教育の基礎」p. 40-41 東京 2020 ウェブサイト「東京 2020 オリンピック聖火リレー」
(25分)	(※時間に余裕があれば実施) 東京 2020 パラリンピックの聖火リレーの考えを学ぶ 東京 2020 パラリンピック聖火リレーのコンセプトについて学びましょう。	東京 2020 パラリンピック聖火リレーのコンセプトは「Share Your Light / あなたは、きっと、誰かの光だ。」であることも学ばせる。	東京 2020 ウェブサイト「東京 2020 パラリンピック聖火リレー」
	3) 聖火リレーのユニークな実施手法を考える どのように聖火リレーを行うと、地域の特色を出せるだろう。ユニークな実施手法を考えよう。	聖火リレーのユニークな実施手法を考えさせる。ただし、リレー実施中に灯された炎が消えないことが条件。 2 人組で話し合い、クラスで発表する	OVEP アクティビティシート p. 12「スピリットに点火する：オリンピック聖火」
まとめ (5分)	聖火と聖火リレーにはどのような意味があったか振り返る。	東京 2020 聖火リレーに関心を持たせる。	

## 教師用指導案「聖火と聖火リレー」

- 対象： 中学生
- 本時のねらい： 聖火の歴史と東京 2020 聖火リレーの意味を理解する
- 準備物： インターネットに接続できるタブレット又は PC
- 適用可能な学習時間： 総合的な学習の時間、道徳、保健体育理論等

時間	学習活動	指導上の留意点	参照資料等
導入 (5分)	1) 本時の見通しを持つ 【発問】聖火リレーが2020年に日本国内で行われますが、本校のある都道府県ではいつ行われるか知っていますか？ オリンピック聖火はどのような意味があるのでしょうか？	本時はオリンピック聖火と聖火リレーの意味について学ぶことを理解させる。 オリンピック聖火について知っていることを話し合わせる。	東京2020ウェブサイト「東京2020オリンピック聖火リレー」、「東京2020パラリンピック聖火リレー」 「東京2020聖火リレー授業用参考資料」
展開 (10分)	2) 聖火の歴史について知る。 (古代における聖火の意味とオリンピックの歴史について知る)	資料を用いてオリンピック聖火の意味を学ぶようにする。	「オリンピック・パラリンピック学習読本中学校編」p.32-33 「オリンピック価値教育の基礎」p.40-41
(10分)	3) 東京2020聖火リレー（オリンピックとパラリンピック）の意味について調べる。それぞれどんなテーマを持っているだろうか。	オリンピックとパラリンピックそれぞれで聖火リレーが行われ、それぞれにコンセプトが考えられていることを学ばせる。	東京2020ウェブサイト「東京2020オリンピック聖火リレー」、「東京2020パラリンピック聖火リレー」
(20分)	4) 東京1964大会時の聖火リレーについて調べる。どのようなコースを通ったのだろうか。また、コースにはどのような意味が込められていたのか、考えてみよう。	東京1964大会では、4つのコースに分かれて全都道府県をリレーしたことを学ばせる。 人々がどのような思いで聖火を迎えたのか、考えさせる (又は、当時を知る地域の人のお話を聞く機会を設ける)。	「オリンピック・パラリンピック学習読本中学校編」p.32-33、p.46



【監修：国立大学法人筑波大学】

時間	学習活動	指導上の留意点	参照資料等
	<p>又は</p> <p>4) 2020年3月から始まる東京2020オリンピック聖火リレーのルートを考えよう。自分の地域（都道府県または市区町村）をリレーするとしたらどのコースが良いだろう？ またランナーはどのような人が良いか話し合おう。</p>	<p>東京2020オリンピック聖火リレーのコンセプトに基づき、また地域の良さを発信するために、どのようなコースを選んだら良いか考えさせる。聖火リレーランナーに推薦したい人を、身近な人物のなかから考えさせる。</p> <p>2人組またはグループで話し合い、発表させる。</p> <p>（又は、各自でランナーへの推薦文を書かせ、発表させる。）</p>	<p>東京2020ウェブサイト「東京2020オリンピック聖火リレー」、「東京2020パラリンピック聖火リレー」</p>
まとめ (5分)	<p>オリンピック聖火の歴史と意味、東京2020聖火リレーの意味について振り返る。</p>	<p>今後も聖火リレーに関心を持つよう方向づける。</p>	

## 教師用指導案「聖火と聖火リレー」

- 対象： 高校生
- 本時のねらい： 聖火の歴史と東京 2020 聖火リレーの意味を理解する
- 準備物： インターネットに接続できるタブレット又は PC
- 適用可能な学習時間： 総合的な学習の時間、現代社会、保健体育 等

時間	学習活動	指導上の留意点	参照資料等
導入 (5分)	1) 本時の見通しを持つ 【発問】オリンピック聖火の採火式はギリシャで行われます。なぜギリシャで行われるのでしょうか。	本時は聖火と聖火リレーの歴史と意味について学ぶことを理解させる。 聖火について知っていることを発表させる。	「オリンピック価値教育の基礎」p. 40-41 「東京 2020 聖火リレー授業用参考資料」
展開 (10分)	2) オリンピック聖火の歴史と採火式について知る。 (古代における聖火の意味とオリンピアで行われる採火式を通して聖火の意味を知る)	資料を用いてオリンピック聖火の歴史とオリンピアでの採火式について調べる。	「オリンピック・パラリンピック学習読本高等学校編」p. 44-45
(15分)	3) 東京 2020 聖火リレー(オリンピックとパラリンピック)の意味について調べる。	オリンピックとパラリンピックそれぞれで聖火リレーが行われ、それぞれにコンセプトがあることを学ばせる。	東京 2020 ウェブサイト「東京 2020 オリンピック聖火リレー」、「東京 2020 パラリンピック聖火リレー」
(15分)	4) 東京 1964 大会の聖火リレーでは、いくつの国や地域を結び、何人のランナーが聖火をつないだのか調べる。また、聖火リレーのコースにはどのような意味が込められていたのか考えさせる。	東京 1964 大会ではギリシャで採火された聖火が、アジアの国々を経由して、当時アメリカの占領下にあった沖縄に到着したこと、全国で約 10 万人もの走者が参加したことなどを学ばせる。 人々がどのような思いで聖火を迎えたのか、考えさせる (又は、当時を知る地域の人のお話を聞く機会を設ける)。	「オリンピック・パラリンピック学習読本高等学校編」p. 44-45、p. 64、p. 73

【監修：国立大学法人筑波大学】

時間	学習活動	指導上の留意点	参照資料等
	<p>又は</p> <p>4) 2020年3月から始まる東京2020オリンピック聖火リレーのルートを考えよう。自分の地域(都道府県または市町村)をリレーするとしたらどのコースが良いだろう? またランナーはどのような人が良いか話し合おう。</p> <p>グループの考えを全体で共有しよう。</p>	<p>東京2020オリンピック聖火リレーのコンセプトに基づき、また地域の良さを発信するために、どのようなコースを選んだら良いか考えさせる。また、聖火ランナーについても考えさせる。</p> <p>2人組またはグループで話し合い、発表させる。</p> <p>(又は、各自でランナーへの推薦文を書かせ、発表させる。)</p>	<p>東京2020ウェブサイト「東京2020オリンピック聖火リレー」、「東京2020パラリンピック聖火リレー」</p>
まとめ (5分)	<p>オリンピック聖火の歴史と意味、東京2020聖火リレーの意味について振り返る。</p>	<p>聖火について振り返らせ、今後も継続して関心を持つようよう方向づける。</p>	

## オリンピック・パラリンピックの観戦のための事前学習

○対象： 小学校低・中学年

○本時のねらい： オリンピック・パラリンピックの意義を理解し、観戦する競技のルールや注目選手について調べ、観戦のための知識を身に着ける。

○準備物： 競技紹介資料（コート図やルール）、ワークシート

時間	学習活動	指導上の留意点	参照資料等
導入 (10分)	1) オリンピック・パラリンピックの意義や価値について学ぶ 【発問】オリンピックやパラリンピックはどんな大会でしょうか。 【説明】大会の意義や価値、競技日程や種目、会場などについて説明する。	オリンピックやパラリンピックは、世界各国から選手が集まって世界一を競う大会であること、いろいろな競技が行われていること。また、それぞれ固有の価値を持っていることを伝える。	東京 2020 大会公式ウェブサイト 「オリンピック競技大会」、 「パラリンピックとは」 東京 2020 教育プログラムウェブサイト 「オリンピックとは」 「パラリンピックとは」
展開 (10分)	2) みなさんが観戦する競技について学習しましょう。 競技の映像を見る。	競技の映像を見せて、イメージを膨らませる。	東京 2020 大会公式ウェブサイト 「オリンピック競技一覧」 「パラリンピック競技一覧」
(10分)	観戦する競技の歴史について学ぶ。いつどのようにして始まった競技か。 競技の特徴やルールについて学ぶ。	観戦する競技の歴史とルールなどの特徴についてわかりやすく説明し、ワークシートに記入させる。	東京都オリンピック・パラリンピック準備局ウェブサイト 「競技図解一覧」
(10分)	観戦する試合の参加チームや参加選手について説明する。 誰か選手を知っていますか、どんな選手に注目すればいいでしょうか。友達と話し合ってみましょう。  (時間に余裕があれば) 観戦する試合の参加国の応援のことばや掛け声を調べてみよう。	観戦する試合について、その参加選手についてわかりやすく説明し、ワークシートに記入させる。 競技全体の注目選手や見どころについても紹介し、考えさせる。	
まとめ (5分)	今日調べたことを競技の観戦に生かそう。さらに知りたいことがあれば、観戦するまでに調べてみよう。	観戦に向けて具体的なイメージをつかめるよう留意する。	

【監修：国立大学法人筑波大学】

### オリンピック・パラリンピックの観戦のための事前学習

○対象： 小学校高学年

○本時のねらい： オリンピック・パラリンピックの意義を理解し、観戦する競技のルールや注目選手について調べ、観戦のための知識を身に着ける。

○準備物： インターネットに接続できるタブレットまたはPC、ワークシート

時間	学習活動	指導上の留意点	参照資料等
導入 (10分)	1) オリンピック・パラリンピックの意義や価値について学ぶ 【発問】オリンピックやパラリンピックはどんな大会でしょうか。 【説明】大会の意義や価値、競技日程や種目、会場などについて説明する。	オリンピックやパラリンピックは、世界各国から選手が集まって世界一を競う大会であること、いろいろな競技が行われていること。また、それぞれ固有の価値を持っていることを伝える。	東京 2020 大会公式ウェブサイト 「オリンピック競技大会」、 「パラリンピックとは」 東京 2020 教育プログラムウェブサイト 「オリンピックとは」 「パラリンピックとは」
展開 (10分) (10分) (10分)	2) みなさんが観戦する競技について学習しましょう。 競技の映像を見る。 【演習①】観戦する競技のルールについて調べてみよう。また、観戦のマナーについても調べてみよう。 【演習②】観戦する試合の参加チームや参加選手について調べてみよう。 どんな選手に注目すればいいでしょうか、話し合ってみよう。  (時間に余裕があれば) 観戦する試合の参加国の応援のことばやコールを調べてみよう。	競技の映像を見せて、イメージを膨らませる。 観戦する競技の歴史とルールなどの特徴についてわかりやすく説明し、ワークシートに記入させる。  小グループを作って観戦する試合について、その参加選手について調べ、ワークシートに記入させる。 競技全体の注目選手や見どころについても調べ、グループで話し合う。	東京 2020 大会公式ウェブサイト 「オリンピック競技一覧」 「パラリンピック競技一覧」 東京都オリンピック・パラリンピック準備局ウェブサイト 「競技図解一覧」
まとめ (5分)	今日調べたことを競技の観戦に生かそう。さらに知りたいことがあれば、観戦するまでに調べてみよう。	観戦に向けて具体的なイメージをつかめるよう留意する。	

## オリンピック・パラリンピックの観戦のための事後学習

○対象：小学生

○本時のねらい：オリンピック・パラリンピックの競技を観戦した経験を振り返って、体験から得たことを共有するとともに、その意義を考え今後の生活に生かせるようにする。

○準備物：ワークシート、模造紙（大型付箋）、色ペン、色鉛筆

時間	学習活動	指導上の留意点	参照資料等
導入 (10分)	1) 観戦を振り返る 観戦を振り返って、当日のワークシートに記入したことをお互いに共有してみよう。  2) クラスで体験を共有する グループで意見を黒板に掲示して発表する。	本時は観戦の体験を振り返り、体験から得たことを共有することを伝える。観戦した内容に応じて、オリンピックの価値（卓越、友情、敬意・尊重）や、パラリンピックの価値（勇気、強い意志、インスピレーション、公平）に着目させる。ワークシートの項目に沿ってペア（小グループ）で、内容を共有する。	観戦当日のワークシート  模造紙、大型付箋など
展開 (25分)  (5分)	3) 観戦を振り返って、印象に残ったことを紹介する絵を描いてみよう。  絵を描きながら、当日の体験を表すタイトルをつけてみよう。絵が完成したら、グループで見せ合ってみよう。タイトルや伝えたいことを紹介しよう。	観戦を振り返って、印象に残ったことを絵に描かせる。  ワークシートのスペースを使って、時間内に完成するよう声をかける。 タイトルと伝えたいことを考えさせる。  グループで各自が描いた絵を見せ合って、伝えたいことを共有させる。	ワークシート 色鉛筆、色ペンなど
まとめ (5分)	同じ競技を観戦しても、気づくことは人によって違う。 今回の観戦で気づいたことをどのようにしたら今後の生活に生かせるか、考えていこう。	児童が描いた絵やタイトルから、観戦の体験から得たことを、具体的に例を挙げてまとめを行う。今後の生活につながるようなまとめを心掛ける。	

【監修：国立大学法人筑波大学】

### オリンピック・パラリンピックの観戦のための事前学習

○対象： 中学生

○本時のねらい： オリンピック・パラリンピックの意義を理解し、観戦する競技のルールや注目選手について調べ、観戦のための知識を身に着ける。

○準備物： インターネットに接続できるタブレットまたはPC、ワークシート

時間	学習活動	指導上の留意点	参照資料等
導入 (10分)	1) オリンピック・パラリンピックの意義や価値について学ぶ 【発問】オリンピックやパラリンピックはどんな大会でしょうか。 【説明】大会の意義や価値、競技日程や種目、会場などについて説明する。	オリンピックやパラリンピックは、世界各国から選手が集まって世界一を競う大会であること、いろいろな競技が行われていること。また、それぞれ固有の価値を持っていることを伝える。	東京 2020 大会公式ウェブサイト 「オリンピック競技大会」、 「パラリンピックとは」 東京 2020 教育プログラムウェブサイト 「オリンピックとは」 「パラリンピックとは」
展開  (10分)  (15分)  (5分)	2) 観戦する競技について、インターネットや資料を使って、グループ内で分担して調べ学習を行う。 【演習①】観戦する競技のルールや特徴について、また、観戦のマナーについても調べてみよう。 【演習②】観戦する試合の参加チームや参加選手について調べてみよう。 どんな選手に注目すればいいでしょうか。 (時間に余裕があれば) 観戦する試合の参加国の応援のことばやコールを調べてみよう。 【演習③】今回観戦する競技場への行き方やその特徴についても調べてみよう。	ペアを作って、2～3 ペアを一緒にしてグループを作り、ペアで調べたことをグループに共有させる。 観戦する競技のルールなどの特徴について調べ、ワークシートに記入させる。 観戦する試合についてその参加選手を調べワークシートに記入させる。競技全体の注目選手や見どころを調べ、ワークシートに記入させる。 競技場の情報についても調べさせる。	東京 2020 大会公式ウェブサイト 「オリンピック競技一覧」 「パラリンピック競技一覧」 東京都オリンピック・パラリンピック準備局ウェブサイト 「競技図解一覧」
まとめ (10分)	【共有】グループで調べた内容をみんなに伝えよう。 観戦する競技についてさらに知りたいことがあれば、当日までに調べてみよう。	学習した内容をまとめる。 観戦までに、さらにその競技に対する興味を高められるように指導する。	

## オリンピック・パラリンピックの観戦のための事前学習

○対象： 高校生

○本時のねらい： オリンピック・パラリンピックの意義を理解し、観戦する競技のルールや注目選手について調べ、観戦のための知識を身に着ける。

○準備物： インターネットに接続できるタブレットまたはPC、ワークシート

時間	学習活動	指導上の留意点	参照資料等
導入 (10分)	1) オリンピック・パラリンピックの意義や価値について学ぶ 【発問】オリンピックやパラリンピックはどんな大会でしょうか。 【説明】大会の意義や価値、競技日程や種目、会場などについて説明する。	オリンピックやパラリンピックは、世界各国から選手が集まって世界一を競う大会であること、いろいろな競技が行われていること。また、それぞれ固有の価値を持っていることを伝える。	東京2020大会公式ウェブサイト 「オリンピック競技大会」、「パラリンピックとは」 東京2020教育プログラムウェブサイト 「オリンピックとは」 「パラリンピックとは」
展開 (10分)	2) 観戦する競技についてインターネットや資料を使って、グループ内で分担して調べ学習を行う。 【演習①】観戦する競技の歴史や背景、ルールなどの特徴について調べてみよう。また、観戦のマナーについても調べてみよう。	ペアや小グループを活用して分担したり調べた情報を共有させたりする。 観戦する競技の歴史や背景、ルールなどの特徴について調べ、ワークシートに記入させる。	東京2020大会公式ウェブサイト 「オリンピック競技一覧」 「パラリンピック競技一覧」 東京都オリンピック・パラリンピック準備局ウェブサイト 「競技図解一覧」
(10分)	【演習②】観戦する試合の参加チームや参加選手について調べてみよう。どんな選手のどんなところに注目すればいいでしょうか。 (時間に余裕があれば) 観戦する試合の参加国の応援のことばやコールを調べてみよう。	観戦する試合についてその参加選手を調べワークシートに記入させる。 競技全体の注目選手や見どころを調べ、ワークシートに記入させる。	
(10分)	【演習③】今回観戦する競技場はどのような施設だろう。その特徴について調べてみよう。	競技場の情報についても調べさせる。	
まとめ (10分)	【共有】グループで調べた内容をみんなに伝えよう。 観戦する競技についてさらに知りたいことがあれば、当日までに調べてみよう。	学習した内容をまとめる。 観戦までに、さらにその競技に対する興味を高められるように指導する。	



【監修：国立大学法人筑波大学】

### オリンピック・パラリンピックの観戦のための事後学習

○対象： 中学生、高校生

○本時のねらい： オリンピック・パラリンピックの競技を観戦した経験を振り返って、体験から得たことを共有するとともに、その意義を考え今後の生活に生かせるようにする。

○準備物： ワークシート、模造紙（大型付箋）、ペン

時間	学習活動	指導上の留意点	参照資料等
導入 (20分)	1) 観戦を振り返る 観戦を振り返って、当日のワークシートに記入したことをお互いに共有してみよう。	本時は観戦の体験を振り返り、体験から得たことを共有することを伝える。観戦した内容に応じて、オリンピックの価値（卓越、友情、敬意・尊重）や、パラリンピックの価値（勇気、強い意志、インスピレーション、公平）に着目させる。	観戦当日のワークシート
	2) クラスで体験を共有する グループで意見を黒板に掲示して発表する。	ワークシートの項目に沿ってペア（小グループ）で、内容を共有する。	模造紙、大型付箋など
展開 (15分)	3) ワークシートを使って、今回の観戦で新たに気付いたことやこれまでの考えが変わったことについて考えてみよう。まず各自がワークシートに記入し、そのあとペアで共有してみよう。	まず個人でワークシートに記入させる。 ペアで個人の考えをもとに話合わせる。 会話が弾まないようなら、観戦の経験から事例を挙げて取り組ませる。	ワークシート
(10分)	4) 今回気づいたことや役立ちそうなことを、日ごろの生活に役立てるにはどうすればいいだろうか。学校生活や社会のどんな場面で役立てることができるか考えてみよう。	小グループを作り、各ペアの考えを紹介しながら、今後の生活に役立てるために、どんな場面でどうやって役立てられるか考えさせる。	学年やクラスにあった今後の行事などの予定
まとめ (5分)	同じ競技を観戦しても、気づくことは人によって違う。今回の観戦で気づいたことを今後の生活に生かすとともに、どのように世の中に役立てられるかも考えていこう。	観戦の体験から得たことを今後の生活に役立てられるよう、具体的な行事や取り組みを例に示して、まとめを行う。	

## 教師用指導案「東京 1964 大会のレガシー」

- 対象： 小学校低学年
- 本時のねらい： 東京 1964 大会が日本に残したものについて理解する。
- 準備物： 東京 2020 組織委員会ウェブサイト、  
オリンピック・パラリンピック学習読本小学校編
- 適用可能な学習時間： 総合的な学習の時間、学級活動、生活科等

時間	学習活動	指導上の留意点	参照資料等
導入 (5分)	1) 本時の見通しを持つ 【発問】新幹線はいつから走り始めたのでしょうか？	新幹線は東京 1964 大会に間に合わせるように作られたことを理解させる。	
展開 (10分)	2) 新幹線は 1964 年 10 月 1 日に東京駅から新大阪駅まで運転が始まりました。 【説明】アジアで初めての開催となるオリンピック・パラリンピック競技大会で、それまでに開業することを目指していたことを理解させる。	第二次世界大戦中の空襲で、東京は焼け野原になったが、その後十数年で復興し、高い技術力で国が発展していった。	オリンピック・パラリンピック学習読本小学校編 p. 44-47
(10分)	3) 新幹線以外に、東京 1964 大会を目指して作られたものはほかにもあることを学ぶ。 ・東京モノレール ・首都高速道路 ・旧国立霞ヶ丘陸上競技場 ・駒沢オリンピック公園総合運動場 ・日本武道館	こうしたことが、その後の日本の社会の発展に寄与したことを理解させる。	
(10分)	4) どの競技で日本選手は活躍したか。 日本選手の活躍はどのように人々が感じたか隣の人と話し合おう。	レスリング、柔道、バレーボールなどで日本の選手が活躍したことを学ぶ。	
まとめ (10分)	東京 1964 大会は日本の社会を元気にしたことを理解する。	東京 2020 大会も日本の社会を変えていくことを考えさせる。	

【監修：国立大学法人筑波大学】

**教師用指導案「東京 1964 大会のレガシー」**

- 対象： 小学校中高学年
- 本時のねらい： 東京 1964 大会が日本に残したものについて理解する。
- 準備物： 東京 2020 組織委員会ウェブサイト、  
オリンピック・パラリンピック学習読本小学校編
- 適用可能な学習時間： 総合的な学習の時間、学級活動、社会科 等

時間	学習活動	指導上の留意点	参照資料等
導入 (5分)	1) 本時の見通しを持つ 【発問】東京 1964 大会の開催により、日本の社会はどのように変わったでしょうか。	東京 1964 大会は、多くの人々にどのような影響を与えたのかについて学ぶことを理解させる。	
展開 (15分)	2) 東京 1964 大会をめざして、日本の高い技術力で次のものが作られた。 ・新幹線・東京モノレール ・首都高速道路 ・旧国立霞ヶ丘陸上競技場 ・駒沢オリンピック公園 総合運動場 ・日本武道館	こうしたものが、その後の日本の発展に関係し、日本の社会を変えたことを理解させる。	オリンピック・パラリンピック学習読本 小学校編 p. 44-47
(10分)	3) 競技ではどのような種目で日本の選手が活躍したか、調べてみよう。	ウエイトリフティング、レスリング、柔道やバレーボールなどで日本選手が活躍したことを学ぶ。	
(10分)	4) オリンピックの後に開かれたパラリンピックはどのようなレガシーが作られたか学習読本を通して考えよう。	スポーツが障がいのある人の社会復帰に大きな役割を果たすことに気づいたこと。障がい者のためのスポーツ大会が開催されるようになったことに触れる。	
まとめ (5分)	東京 1964 大会は、その後のスポーツや日本の社会を発展させたことを理解する。	東京 2020 大会も日本の社会に大きな影響を及ぼすであろうことを考えさせる。	

## 教師用指導案「東京 1964 大会のレガシー」

- 対象： 中学生
- 本時のねらい： 東京 1964 大会が日本に残したものについて理解する。
- 準備物： 東京 2020 組織委員会ウェブサイト、  
オリンピック・パラリンピック学習読本中学校編
- 適用可能な学習時間： 総合的な学習の時間、学級活動、社会科、保健体育理論 等

時間	学習活動	指導上の留意点	参照資料等
導入 (5分)	1) 本時の見通しを持つ 【発問】大会の開催により有益な遺産(レガシー)を開催国と開催都市に残すことが求められている。東京 1964 大会のレガシー(有形と無形)はどのようなものだったのでしょうか？	東京 1964 大会のレガシーについて何が考えられるか、発表させる。	オリンピック・パラリンピック学習読本中学校編 p. 38
展開 (20分)  (15分)	2) 東京 1964 大会の有形レガシーには次のものがある。 ・東海道新幹線や東京モノレールなどの交通網 ・首都高速道路などの道路網 ・旧国立霞ヶ丘陸上競技場や駒沢オリンピック公園総合運動場、日本武道館などの競技施設 無形のレガシーは次のもの ・スポーツ振興法が作られ、国や地方公共団体が市民のためにスポーツ環境を整え、スポーツに取り組む仕組みづくりが始められた。 ・街の美化運動がはじめられたことである。  3) 東京 1964 パラリンピックのレガシーとして、その後に障がい者スポーツの団体や競技会がつくられた。これらはどのように今日に受け継がれているか考えよう。	第二次世界大戦で、東京が焼け野原となったが、その後 19 年で完全に復興した大都市になり、高い技術力で都市のインフラを整備したことを理解させる。  東京 1964 大会以降に国民がスポーツに親しむようになって行ったことに気づかせる。  グループごとまたは隣の人と考える。	オリンピック・パラリンピック学習読本中学校編 p. 38-41
まとめ (10分)	考えをクラスで共有するとともに、東京 1964 大会は日本の社会を大きく変えたことを理解する。	東京 2020 大会も日本の社会に大きな影響を及ぼすであろうことを考えさせる。	

【監修：国立大学法人筑波大学】

教師用指導案「東京 1964 大会のレガシー」

- 対象： 高校生
- 本時のねらい： 東京 1964 大会が当時の日本に残したものについて理解する。
- 準備物： 東京 2020 組織委員会ウェブサイト、  
日本オリンピック委員会ホームページ
- 適用可能な学習時間： 総合的な学習の時間、日本史、保健体育理論 等

時間	学習活動	指導上の留意点	参照資料等
導入 (5分)	1) 本時の見通しを持つ 【発問】東京 1964 大会は日本にどのような遺産（レガシー）を残したのかを考えさせる。	東京 1964 大会のレガシーを学ぶことで、東京 2020 大会のレガシーを理解させる。	
展開 (20分)	2) 有形のレガシーは都市インフラと競技インフラがある。 ・都市インフラ 新幹線や東京モノレールの開業、首都高や地下鉄の整備 ・競技インフラ 国立霞ヶ丘競技場の、代々木競技場や駒沢オリンピック公園。 無形レガシーは、スポーツ振興法を通して国や地方公共団体によるスポーツ振興、大会で示された平和の尊さ、マナー向上や美化運動など。	レガシーには有形と無形のものがあり、東京 1964 大会のレガシーについて両者のレガシーを学ぶ。 日本の高い技術力でインフラを整備し、オリンピック国民運動に示されたように、マナー向上や街の美化運動も行われた。こうしたものが、その後の日本の発展に寄与し、日本の社会を変えたことを理解させる。	オリンピック・パラリンピック学習読本 高等学校編 p. 54-55、p. 72-78
(15分)	3) 東京 1964 パラリンピックのレガシーは、障がいのある人の社会復帰にスポーツが有効であることを広く認識するきっかけになり、障がい者スポーツの競技会が開催されるようになったことである。これらは今日の日本にどのように受け継がれているかグループで話し合おう。	パラリンピックのレガシーについてグループごとに考える。	オリンピック・パラリンピック学習読本 高等学校編 p. 79
まとめ (10分)	考えをクラスで共有し、東京 1964 大会は日本の社会を大きく変えたことを理解する。	東京 2020 大会も日本の社会に大きな影響を及ぼすであろうことを考えさせる。	

## 教師用指導案「環境に配慮した東京 2020 大会選手村」

- 対象： 小学校低学年
- 本時のねらい： 選手村における木材の活用を知り、環境に配慮した重要性を理解する。
- 準備物： 東京 2020 大会公式ウェブサイト「持続可能性」
- 適用可能な学習時間： 総合的な学習の時間、学級活動、生活科 等

時間	学習活動	指導上の留意点	参照資料等
導入 (5分)	1) 本時の見通しを持つ 東京 2020 大会の選手村の工夫された点について知る。	日本中から木を集めて選手村に使い、大会後も木材を使うことが環境にやさしいことを学ぶ。	
展開 (10分)  (20分)	2) 選手村の中にあるビレッジプラザについて知る オリンピック・パラリンピックには、選手たちが一緒に生活する施設である選手村が作られる。その中に、選手同士の交流が行われるビレッジプラザという場所があり、歓迎の式典が行われる。ここは日本の各地から提供された木材を使用して作られ、木材は大会後に各地に戻されて活用される。  3) 木材でできたビレッジプラザで、あなたのクラスが選手との交流会を行うことになったとしたら、どのような交流会を行うか考えてみよう。	ビレッジプラザのイメージ図を東京 2020 大会公式ウェブサイトから見せる。 お店やカフェなどが入り、選手たちの交流の場所であること、また、大会後も木を大切に使うことも理解させる。  グループで考える。	東京 2020 大会公式ウェブサイト「日本の木材活用リレー」  「オリンピック価値教育の基礎」アクティビティシート p. 33
まとめ (10分)	グループで考えたことを発表する。建物を環境に優しいものにして、大会が終わった後も木を大切に使うことが大事であることを確認する。		

【監修：国立大学法人筑波大学】

教師用指導案「環境に配慮した東京 2020 大会選手村」

- 対象： 小学校中高学年
- 本時のねらい： 選手村における木材の活用を知り、環境に配慮する重要性を理解する。
- 準備物： 東京 2020 大会公式ウェブサイト「持続可能性」
- 適用可能な学習時間： 総合的な学習の時間、学級活動、生活科 等

時間	学習活動	指導上の留意点	参照資料等
導入 (5分)	1) 本時の見通しを持つ 東京 2020 大会の選手村について、環境の点で工夫されていることについて知る。	日本中から木材を集めて、選手村に使い、大会後も木材を使うことが環境にやさしいことを学ぶ。	
展開 (10分)	2) 環境を守らないと温暖化が進み、雪が溶けて冬のスポーツが行えなくなるなどの影響があることを理解させる。 長野 1998 冬季大会で、環境に配慮した取組を紹介する。		「オリンピック・パラリンピック競技大会学習読本」小学校編 p. 34-35
(10分)	3) 東京 2020 大会の選手村の中に、選手の生活を支え、また選手同士の交流が行われるビレッジプラザという場所があり、歓迎の式典などが行われる。ここは日本の各地から提供された木材を使用して作られることを学び、木材はなぜ環境に良いのか考える。	ビレッジプラザのイメージ図を東京 2020 大会公式ウェブサイトから見せる。 木材は二酸化炭素を吸収して貯める役割があること、植林などで繰り返し生産できることなどを話し合う。	東京 2020 大会公式ウェブサイト「日本の木材活用リレー」
(10分)	オリンピック・パラリンピックが終わったら、この木材は壊すのではなく、提供した自治体に戻し、活用される。どのような活用が考えられるか考えよう。	レガシーとしてリユースする案をグループで考える。	東京 2020 大会公式ウェブサイト「日本の木材活用リレー」
まとめ (10分)	グループの成果をクラスで共有する。大会中のみならず、大会が終わった後の資材の使い方を考えておくことの大切さを確認する。		東京 2020 大会公式ウェブサイト「日本の木材活用リレー」にある木材を提供した自治体のメッセージ

## 教師用指導案「環境に配慮した東京 2020 大会競技会場」

- 対象： 中学生
- 本時のねらい： 大会における CO<sub>2</sub> 削減の取組について理解するとともに、一人ひとりができる CO<sub>2</sub> 削減・吸収活動への意識を高め、取組を促す。
- 準備物： インターネットに接続できるタブレットまたは PC、ワークシート
- 適用可能な学習時間： 総合的な学習の時間、理科 等

時間	学習活動	指導上の留意点	参照資料等
導入 (5分)	1) 本時の見通しを持つ 【発問】一般市民に参加を呼びかけている東京 2020 大会における CO <sub>2</sub> 削減・吸収活動について知っていますか？	本時は、CO <sub>2</sub> 削減の重要性や東京 2020 大会における CO <sub>2</sub> 削減の取組と自分たちとのかわりについて学ぶことを理解させる。	
展開 (15分)	2) 東京 2020 大会における CO <sub>2</sub> 削減の取組について知る。 ・約 6 割が既存施設 ・自然採光や通風に配慮し、再生資材を活用して建設 ・省エネルギー性能の高い設備や機器の導入 ・再生可能エネルギーの電気を使用 いくつかの新規の競技会場についてインターネットで調べる。	東京 2020 大会における CO <sub>2</sub> 削減の取組は、世界的な課題である気候変動への対策として、また大会のレガシーとして重要であることを伝える。 新規の競技会場は、資材、設備・機器、構造など持続可能性に配慮した施設になること、再生可能エネルギーの利用が CO <sub>2</sub> 削減につながることを理解させる。	東京 2020 大会公式ウェブサイト「持続可能性に配慮した運営計画第二版」
(20分)	3) CO <sub>2</sub> 削減・吸収活動について知る。1. 夏季や冬季の一定期間、家庭の電気使用量が前年度の使用量を下回るよう努力する。2. LED 照明等の省エネ家電への買い替えを促進。3. 公共交通機関の利用を促進	これらのうち、どの項目なら生徒が自分でできるかを考えさせる。あるいはそれ以外に自分でできることを考えさせる。(グループであるいは個人で) 1ヶ月間実行させるよう促す。	東京 2020 大会公式ウェブサイト「東京 2020 大会における市民による CO <sub>2</sub> 削減・吸収活動について」
まとめ (10分)	考えた内容を発表し共有する。脱炭素社会の実現に向けて、一人ひとりの参画が重要であることを確認する。		



【監修：国立大学法人筑波大学】

教師用指導案「環境に配慮した東京 2020 大会競技会場」

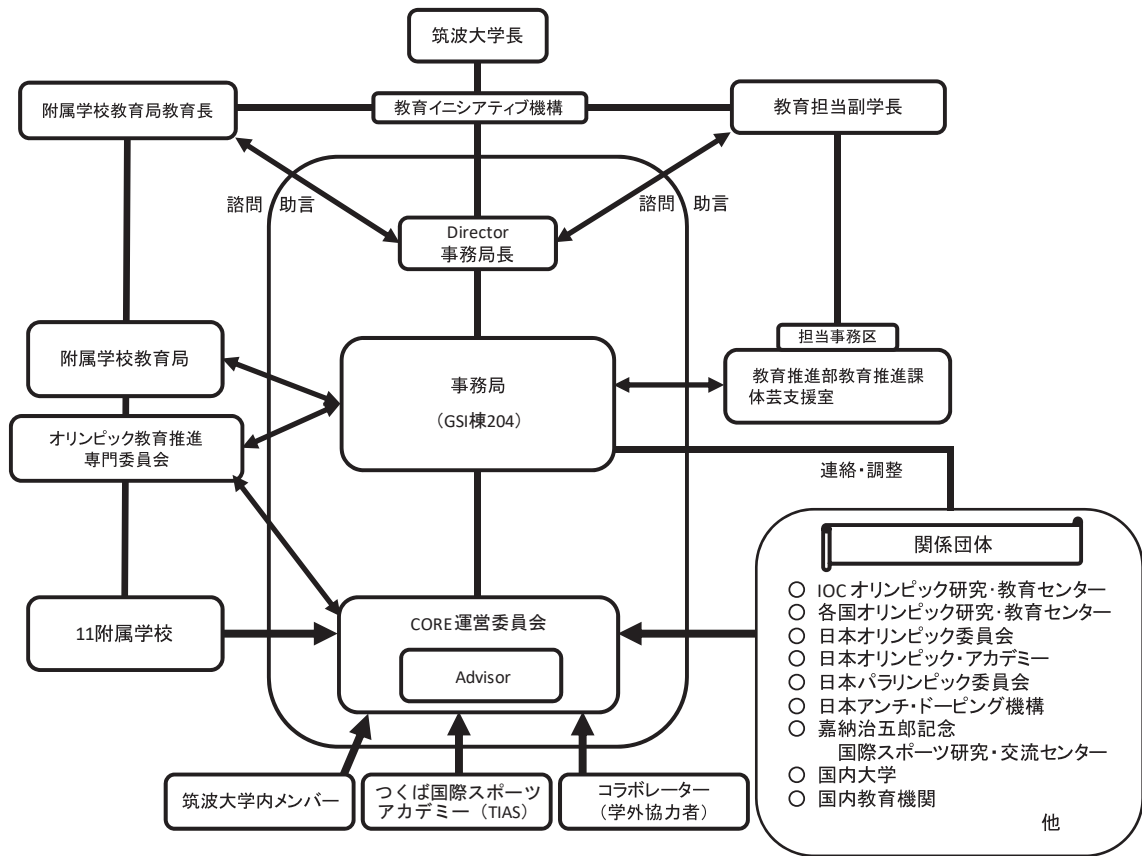
- 対象： 高校生
- 本時のねらい： 大会における CO<sub>2</sub> 削減の取組について理解するとともに、一人ひとりができる CO<sub>2</sub> 削減・吸収活動への意識を高め、取組を促す。
- 準備物： インターネットに接続できるタブレットまたは PC、ワークシート
- 適用可能な学習時間： 総合的な学習の時間、理科 等

時間	学習活動	指導上の留意点	参照資料等
導入 (5分)	1)本時の見通しを持つ 【発問】一般市民に参加を呼びかけている東京 2020 大会における CO <sub>2</sub> 削減・吸収活動について知っていますか？	本時は、CO <sub>2</sub> 削減の重要性や東京 2020 大会における CO <sub>2</sub> 削減の取組と自分たちとのかわりについて学ぶことを理解させる。	
展開 (15分)	2) 東京 2020 大会の競技会場における CO <sub>2</sub> 削減の取組について知る。 ・約 6 割が既存施設 ・自然採光や通風に配慮し、再生資材を活用して建設 ・省エネルギー性能の高い設備や機器の導入 ・再生可能エネルギーの電気を使用 いくつかの新規の競技施設についてインターネットで調べてみよう。	東京 2020 大会における CO <sub>2</sub> 削減の取組は、世界的な課題である気候変動への対策として、また大会のレガシーとして重要であることを伝える。 新規の競技会場は、資材、設備・機器、構造など持続可能性に配慮した施設になること、再生可能エネルギーの利用が CO <sub>2</sub> 削減につながることを理解させる。	東京 2020 大会公式ウェブサイト「持続可能性に配慮した運営計画第二版」
(20分)	3) CO <sub>2</sub> 削減・吸収活動について知る。 1.夏季や冬季の一定期間、家庭の電気使用量が前年度の使用量を下回るよう努力する。 2. LED 照明等の省エネ家電への買い替えを促進。 3. 公共交通機関の利用を促進	これらのうち、どの項目なら生徒が自分でできるかを考えさせる。あるいはそれ以外に自分でできることを考えさせる。(グループであるいは個人で) 1ヶ月間実行させるよう促す。	東京 2020 大会公式ウェブサイト「東京 2020 大会における市民による CO <sub>2</sub> 削減・吸収活動について」
まとめ (10分)	考えた内容を発表し共有する。 脱炭素社会の実現に向けて、一人ひとりの参画が重要であることを確認する。		

## 筑波大学附属学校オリンピック教育推進専門委員会委員（令和元年度）

委員長	茂呂 雄二	附属学校教育局教育長
副委員長	雷坂 浩之	附属学校教育局教育長補佐
	濱本 悟志	附属学校教育局次長
	小林美智子	教育長特命補佐
	真田 久	体育系教授
	宮崎 明世	体育系准教授
	澤江 幸則	体育系准教授
	江上いずみ	客員教授
	清水 由	附属小学校教諭
	秋山 和輝	附属中学校教諭
	鮫島 康太	附属高等学校教諭
	登坂 太樹	附属駒場中・高等学校主幹教諭
	藤原 亮治	附属坂戸高等学校教諭
	山本 夏幹	附属視覚特別支援学校教諭
	岡本 三郎	附属聴覚特別支援学校教諭
	紅林 仁	附属大塚特別支援学校教諭
	寒河江 核	附属桐が丘特別支援学校教諭
	塚田 直也	附属久里浜特別支援学校教諭

## 筑波大学オリンピック教育プラットフォーム組織図



オリンピック教育 vol.8 2019/04-2020/03

---

2020年6月発行

発行者 筑波大学オリンピック教育プラットフォーム / 附属学校オリンピック教育推進専門委員会  
発行所 オリンピック教育プラットフォーム (CORE) 事務局  
〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1 筑波大学 GSI 棟 204  
事務局長 真田久  
編集者 福田佳太

---